令和４年度

上川農業試験場年報

令和５年１０月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構　農業研究本部

上 川 農 業 試 験 場

目　　次

Ⅰ　概　要 ---------- 1
1．沿　革 ---------- 1
2．施設及び試験圃場 ---------- 1
3．機　構 ---------- 2
4．職員の配置 ---------- 3
5．職　員 ---------- 3
1）現在員 ---------- 3
2）転入者 ---------- 3
3）転出者及び退職者 ---------- 4
6．支出決算額 ---------- 4
7．新たに設置した主要施設及び備品 ---------- 4

Ⅱ　作　況 ---------- 5
1．気象概況 ---------- 5
2．作　況 ---------- 7
1）各作物の耕種概要 ---------- 7
2）各作物の作況 ---------- 7
（1）水　稲 ---------- 7
（2）秋まき小麦 ---------- 9
（3）春まき小麦 ---------- 10
（4）大　豆 ---------- 11
（5）小　豆 ---------- 12
（6）ばれいしょ ---------- 13

Ⅲ　試験研究及び地域支援活動 ---------- 14
1．各グループの試験研究成果及び地域支援活動等の概要 ---------- 14
1）水稲グループ ---------- 14
2）生産技術グループ ---------- 14
2．各グループの試験研究課題 ---------- 15
1）水稲グループ ---------- 15
2）生産技術グループ ---------- 16
3．地域支援活動 ---------- 18
1）地域農業技術支援会議 ---------- 18
2）道北地域農業技術センター連絡協議会（NATEC） ---------- 19
3）上川水稲直播ネットワーク ---------- 19

Ⅳ　試験研究の成果と普及 ---------- 20
１．技術普及に移された成果 ---------- 20
１）普及奨励事項 ---------- 20
２）普及推進事項 ---------- 20
３）指導参考事項 ---------- 20
４）研究参考事項および行政参考事項 ---------- 20
２．論文ならびに資料 ---------- 20
１）研究論文、試験成績 ---------- 20
２）口頭・ポスター発表 ---------- 21
３）専門雑誌、著書・資料 ---------- 22
４）新聞等記事 ---------- 23
５）印刷刊行物 ---------- 23
３．研修生の受入 ---------- 23
１）普及指導員研修 ---------- 23
２）学校教育研修・職場体験学習 ---------- 23
３）JICA 研修 ---------- 23
４）その他 ---------- 23
４．技術相談及び技術指導 ---------- 24
１）技術相談 ---------- 24
２）技術指導 ---------- 25
５．講師等の派遣 ---------- 26
６．関連委員会・学会研究会役員 ---------- 26

Ⅴ　広報・場運営・その他 ---------- 27
１．広　報 ---------- 27
１）一般参観来場者 ---------- 27
２）公開デー ---------- 27
３）新技術発表会 ---------- 27
４）マスコミ等への対応 ---------- 27
５）イベント等への出展 ---------- 28
２．場運営 ---------- 28
１）場内委員会 ---------- 28
２）諸会議 ---------- 28
３）職員の研修 ---------- 29
４）表彰および学位授与 ---------- 30
３．自己点検への対応 ---------- 31

Ⅰ　概　　要

１．沿　革

当場は、明治 19 年に旧神居村忠別（現旭川市神居１条１丁目)に忠別農作試験所として発足し農作物栽培の適否を試みたのを始めとする。この試験所は、翌年上川仮道路開削に従事する樺戸集治監忠別出張所に引き継がれた。明治 22 年道庁は屯田兵及び移住民に蚕桑の業を授け、かたわら農作物を試作する忠別農作試験所（現旭川市１条２、３丁目）を復活した。明治 30 年に旭川村６条 11 丁目（現旭川東高校敷地)に、さらに明治 37 年には旭川の市街拡張のため永山村(現旭川市永山６条 18 丁目）に移転し、平成５年度末までの 90 年間にわたって各種の試験を行った。翌平成６年度からは現在地（上川郡比布町南１線５号)の新庁舎、新圃場での試験を開始した。

長い歴史の間に名称や機構も変遷し、昭和 25 年には農業試験研究機関の整備統合で、従来の試験研究が国立と道立に二分されたのに伴い、当場は道費支弁の北海道農業試験場上川支場となり、さらに昭和 39 年 11 月、本道の農畜一体とした試験研究を行うため機構改革が実施され、当場は北海道立上川農業試験場と改称された。

試験業務については、従来の蚕桑中心の試験から明治 27 年には一般畑作の試験に移り、さらに明治 33 年からは水稲も取り上げられるようになった。明治 37 年永山村に移転してからは水稲に関する試験が多くなり、それらの成果は広く普及された。大正４年からは水稲の本格的品種改良試験が開始された。その結果、大正時代には「坊主」系統が広く栽培され、昭和 10 年に有名な「富国」ができるまで「坊主」の時代が続いた。その後、戦前戦後を通じ数多くの優良品種を育成し、名実ともに当場は本道稲作に関する中心的試験機関となった。

なお、昭和２年より昭和 21 年まで地方債事業として、農林省指定による水稲新品種育成試験を実施し、その後、昭和 22 年より 25 年まで札幌農事改良実験所上川試験地が併置されていた。昭和 41 年には農林省の全額助成による水稲指定試験が再度設置され、昭和 44 年には普及事業の強化にともない専門技術員が配置された。

一方、北海道立農業試験場原々種の生産事業が士別村東山で昭和 29 年から始められ、昭和 31 年に女満別分場の廃止と同時に北海道立農業試験場原々種農場士別分場が発足した。昭和 33 年には北海道立農業試験場上川支場畑作科が併置され、畑作試験に着手した。昭和 34 年に北海道原々種農場士別分場を廃止すると共に、北海道立上川農業試験場畑作科と改称した。昭和 62 年には、農業試験研究機関の機構改正により園芸部門を強化し畑作園芸科と改称し、平成４年度からは畑作科と園芸科に分離し一層の強化を図った。その後、平成５年度末の本庁舎移転に伴い士別市の畑作科、園芸科も現在地に統合された。

本庁舎の比布町への移転整備経過は、平成元年９月に現在地への移転が決定され、平成３年度に圃場整備、平成４年度に庁舎及び付属施設建設工事に着手し、平成６年８月末に外構工事を含め完成した。

平成 18 年度の機構改正により天北農業試験場は廃止の上、上川農業試験場天北支場とされた。

平成 22 年 4 月には地方独立行政法人北海道立総合研究機構が発足し、22 の道立試験研究機関が移行して、当場は農業研究本部上川農業試験場となった。この機構再編ではグループ制が導入され、水稲、生産環境、地域技術の３グループが設置されたほか、道職員である農業改良普及員は道農政部生産振興局技術普及課に所属の上、上川農試駐在という形となり、技術普及室が置かれた。

平成 30 年 7 月、根釧農業試験場の酪農試験場への改称に伴い、天北支場は酪農試験場天北支場となった。

令和２年４月、機構再編により生産環境と地域技術の両グループが統合され、生産技術グループとなった。

２．施設及び試験圃場

１）位置と土壌条件

当場は、上川郡比布町の基線（国道 40 号線）と町道南１線、町道５号と６号に囲まれた面積約 28.5 ha の方形の用地で、その標高は 160m 前後である。中央には用地を東西に二分する形でウッペツ工場川が流れており、東方約 700m には石狩川がある。分布す

る土壌は褐色低地土で、一部は礫層が地表下30～60㎝に現れる礫質褐色低地土である。試験圃場造成前の土地利用は水田、宅地、農道等であった。

試験圃場造成に当たり、農道は殆どそのままの位置で新しい農道を造成した。試験圃場は、表土部分を取り除き、水田は心土均平を、畑圃場は心土部分の厚さ30㎝の石礫除去を行った後、表土戻しをした。

造成された試験圃場の代表的な土壌条件は、水田では細粒褐色低地土・造成相、また畑圃場は礫質褐色低地土・造成相である。

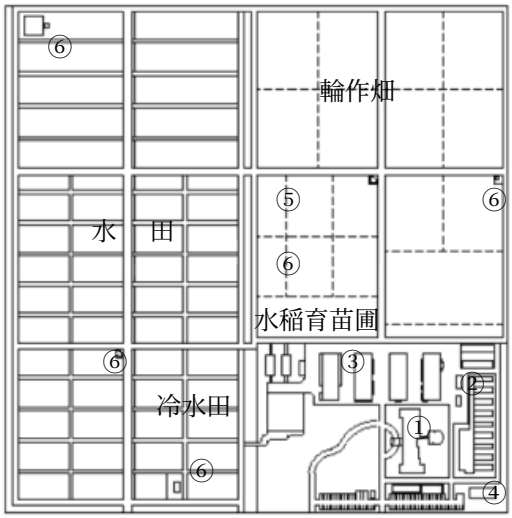
2）施設、圃場の利用区分と面積

施設	(㎡)
庁舎	2,804
吹抜小屋	214
車庫	179
バイオテクノロジー研究棟	2,147
人工気象棟・ガラス網室	459
給油所	3
昆虫飼育実験棟	282
参観者便所	27
共同作業棟	916
共同調査棟	907
冷水田ポンプ舎	63
水田ポンプ舎	20
畑かんポンプ舎	11
農機具庫	907
外便所(2)	72
研究資材棟	907
乾燥庫	214
その他	279
施設合計	10,411

試験圃場	(ha)
水田関係	14.05
水田	9.99
（内冷水田）	1.05
農道・畦畔	2.85
用排水路	0.29
施設・用地など	0.92
畑関係	9.52
畑	7.81
農道	1.13
枠試験地	0.19
堆肥場	0.20
施設・用地など	0.15
排水路	0.04
建物敷地	4.83
用地合計	28.40

3）土地利用及び施設・圃場の配置

（土地利用・施設・圃場の配置図）



① 庁舎　　④ 昆虫飼育実験棟
② 温室・人工気象室　　⑤ 精密枠試験圃
③ 調査・作業棟　　⑥ 圃場内施設

3．機　構

総務課：予算・給与・財務、理事長印・文書の管理、自動車及び施設等の使用・管理に関することを行う。その他各グループの主管に属さないことを行う。

研究部

水稲グループ：水稲の品種育成に関する試験研究・調査、除草剤の試験、研究及び調査を行う。作業計画、労務及び業務用諸施設の管理を行う。

生産技術グループ：水稲の栽培及び品質、土壌肥料および土壌環境、病害虫、畑作物及び園芸作物、に関する試験、研究及び調査を行う。地域農業技術の支援、農業研究情報の提供と専門技術の調査研究、開発された技術の体系化と普及定着、に関することを行う。

４．職員の配置（令和５年３月３１日現在）

	法人職員	道派遣	再任用	計	備　　考
場　　長	1			1	
研　究　部　長	1			1	
総　務　課		5		5	
水　稲　G	8			8	
生　産　技　術　G	１３		2	１３	再雇用は法人職員の内数
合　　計	２３	5	2	２８	再任用は内数

５．職　員

１）現在員（令和５年３月３１日現在）

職　名	氏　名	職　名	氏　名
場　　長	吉　村　康　弘	研　究　主　幹	後　藤　英　次
研　究　部　長	竹　内　晴　信	主査(栽培環境)	唐　　星　児
総　務　課　長	徳　光　恵　理	主任主査（病虫）	長　濱　　恵
主査（総務）	伊　東　良　浩	主査（畑作園芸）	髙　濱　雅　幹
主査（調整）	兼　山　幸　記	主任主査(地域支援)	内　田　哲　嗣
技　　師	髙　﨑　由　利　奈	研　究　主　任	齋　藤　優　介
技　　師	本　田　愛　花	研　究　主　任	平　山　裕　治
研　究　主　幹	尾　﨑　洋　人	研　究　主　任	栢　森　美　如
主査（育種）	木　下　雅　文	研　究　職　員	古　山　真　一
研　究　主　任	熊　谷　　聡	研　究　職　員	堀　川　謙　太　郎
研　究　主　任	粕　谷　雅　志	研　究　職　員	佐　々　木　大　介
研　究　職　員	森　田　耕　一	専門研究員(再任用)	古　川　勝　弘
専　門　主　任	笹　木　正　志	専門研究員(再任用)	中　村　隆　一
専　門　主　任	中　川　　諭		
主　　任	樫　村　　優		

２）転入者

職　名	氏　名	発令年月日	備　　考
場　　長	吉　村　康　弘	R4.4.1	農業研究本部から
主査（調整）	兼　山　幸　記	〃	北海道留萌振興局から
技　　師	本　田　愛　花	〃	北海道石狩振興局から
研　究　主　幹	尾　﨑　洋　人	〃	道南農業試験場から
研　究　主　幹	後　藤　英　次	〃	中央農業試験場から
主査(栽培環境)	唐　　星　児	〃	北見農業試験場から
研　究　主　任	栢　森　美　如	〃	十勝農業試験場から

3）転出者及び退職者

職　　名	氏　　名	発令年月日	備　　考
主査（調整）	中西光弘	R4.4.1	北海道上川総合振興局へ
研究主幹	宗形信也	〃	北見農業試験場へ
研究主幹	鈴木亮子	〃	花・野菜技術センターへ
主任主査(栽培環境)	藤倉潤治	〃	道南農業試験場へ
研究主査	大塚省吾	〃	酪農試験場へ
研究職員	村田暢明	〃	十勝農業試験場へ
場長	安積大治	R4.3.31	定年退職
主任	井上憲明	〃	再任用満了

6．支出決算額

（単位：円）

科　目	当初予算額	最終予算額	決算額	残　額
戦略研究費	1,900.000	1,900,000	1,900,000	0
重点研究費	4,400,000	4,400,000	4,400,000	0
職員研究奨励費	0	0	0	0
経常研究費	9,817,000	10,317,000	10,072,972	244,028
研究開発推進費	0	0	0	0
技術普及指導費	222,000	447,880	416,861	31,019
研究用備品整備費	0	4,092,000	4,092,000	0
維持管理経費	38,474,000	38,474,000	35,972,727	1,776,273
知的財産経費	0	0	0	0
運営経費	27,960,000	29,874,000	28,448,368	1,425,632
共同研究費	1,300,000	1.330,000	1,330,000	0
国庫受託研究費	1,320,000	1,330,000	1,330,000	0
道受託研究費	4,260,000	4,229,000	4,228,543	457
その他受託研究費	29,825,000	30,333,000	30,326,977	6,023
施設整備費補助金	0	11,308,000	11,308,000	0
施設整備費(積立金)	0	34,100,000	34,100,000	0
道補助金	0	6,883,000	6,883,000	0

7．新たに設置した主要施設及び備品

品　　名	形　　式	数量	金額（円）
軽トラック	ダイハツ　ハイゼットダンプ仕様	1台	1,379,430
ハンマーナイフモア	三陽機器　ZH-3708S	1台	1,199,000
デジタルメジャー	ディジ・テック　DDM-102L3	1台	190,300
空撮画像解析ソフト	Pix4D　mapper	1式	549,989
バッテリー	FLLYROWER　LifePo4バッテリー	1台	158,950
バインダー	ヤンマー　Be226VDW	1台	627,000
あぜ塗り機	コバシ　XRS751T-3S	1台	957,000
袋詰自動計量機（ICコンビ）	タイガーカワシマ　LSI-42BL	1台	341,000

Ⅱ 作　　況

１．気象概況

≪令和３年（2021 年）≫

11 月：平均気温は 1.8℃高く、降水量は平年の 138 %、日照時間は平年の 113%であった。

12 月：平均気温は 1.3℃高く、降水量は平年の 91 %、日照時間は平年の 117%であった。

≪令和４年（2022 年）≫

１月：平均気温は 0.1℃低く、降水量は平年の 76%、日照時間は平年の 111%であった。

２月：平均気温は 0.6℃高く、降水量は平年の 72%、日照時間は平年の 106%であった。

３月：平均気温は 1.2℃高く、降水量は平年の 102 %、日照時間は平年の 58%であった。

４月：平均気温は 1.6℃高く、降水量は平年の 72%、日照時間は平年の 111%であった。

５月：平均気温は 0.5℃高く、降水量は平年の 152 %、日照時間は平年の 103%であった。

６月：平均気温は 0.6℃低く、降水量は平年の 208 %、日照時間は平年の 100%であった。

７月：平均気温は 0.7℃高く、降水量は平年の 35%、日照時間は平年の 96%であった。

８月：平均気温は 0.5℃低く、降水量は平年の 132 %、日照時間は平年の 87%であった。

９月：平均気温は 0.1℃高く、降水量は平年の 102 %、日照時間は平年の 120%であった。

10 月：平均気温は 0.8℃高く、降水量は平年の 84 %、日照時間は平年の 117%であった。

本年の根雪終は 4 月 6 日で平年より 5 日早く、積雪期間は平年より 28 日短かった。耕鋤始（融雪剤散布圃場）は 4 月 14 日で平年より 6 日早かった（表１）。令和 3 年 11 月から令和 4 年 10 月までの気象は表 2 のとおりである。

以上、農耕期間の 4～10 月についてまとめると、平均気温は 8 月、9 月が平年並で、6 月が 0.6℃平年より低く、4 月が 1.6℃、5 月が 0.5℃、7 月が 0.7℃、10 月が 0.8℃平年より高かった。降水量は 5 月、8 月が平年の 132～152%と多かったが、4 月、6 月、7 月、10 月は平年の 32～54%と少なかった。日照時間は 5 月～7 月が平年並で、8 月が平年の 87%と少なく、4 月、9 月、10 月は平年の 111～120%と多かった。5～9 月までの積算値は、平年に比べて平均気温が 4℃高く、降水量が 91 ㎜多く、日照時間が 8 時間多かった（表 3）。

表１　季節表

	初　霜（前年）	降雪始（前年）	根雪始（前年）	根雪終（月日）	積雪期間（日）	降雪終（月日）	耕鋤始（月日）	晩 霜（月日）	初　霜（月日）	降雪始（月日）
本 年	10月19日	10月17日	12月13日	4月6日	115	4月8日	4月14日	未観測	10月13日	11月3日
平 年	10月8日	10月27日	11月20日	4月11日	143	4月27日	4月20日	5月14日	10月9日	10月27日
比 較	11	△ 10	23	△5	△28	△ 19	△ 6	－	4	7

注 1) 本年は2021～2022年の値。
2) 根雪始、根雪終、積雪期間、耕鋤始は比布圃場の観測値。平年は過去10か年の平均値。
3) 初霜、降雪始、降雪終、晩霜は旭川地方気象台による旭川市の観測値。晩霜は2020年から観測中止。初霜、降雪始、降雪終の平年は過去10か年の平均値。晩霜の平年は2011～2020年の平均値。
4) △印は平年に比べて早いあるいは短いことを示す。

表２　気象表（旬別）

年月	旬	平均気温（℃）			最高気温（℃）			最低気温（℃）			降水量（mm）			降水日数（日）			日照時間（hrs）		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
2021年 11月	上旬	6.3	5.0	1.3	11.3	9.2	2.1	2.1	1.1	1.0	50.5	30.7	19.8	7.0	5.3	1.7	28.0	23.5	4.5
	中旬	4.4	1.6	2.8	8.0	5.5	2.5	0.8	-2.2	3.0	31.0	37.9	▲6.9	7.0	6.2	0.8	24.9	19.4	5.5
	下旬	0.0	-1.4	1.4	3.6	1.9	1.7	-3.9	-5.1	1.2	54.0	29.6	24.4	8.0	7.0	1.0	15.4	17.5	▲2.1
平均または合計		3.6	1.7	1.8	7.6	5.5	2.1	-0.3	-2.1	1.7	135.5	98.2	37.3	22.0	18.5	3.5	68.3	60.4	7.9
12月	上旬	-0.1	-3.5	3.4	4.0	-0.5	4.5	-4.4	-7.5	3.1	20.0	31.9	▲11.9	4.0	7.0	▲3.0	29.3	14.4	14.9
	中旬	-3.0	-4.9	1.9	-0.2	-1.5	1.3	-6.2	-9.5	3.3	26.0	22.5	3.5	8.0	6.9	1.1	6.2	16.3	▲10.1
	下旬	-7.9	-6.5	▲1.4	-4.5	-3.0	▲1.5	-13.0	-11.0	▲2.0	25.5	24.5	1.0	9.0	8.4	0.6	19.8	16.4	3.4
平均または合計		-3.7	-5.0	1.3	-0.2	-1.7	1.4	-7.9	-9.3	1.5	71.5	78.9	▲7.4	21.0	22.3	▲1.3	55.3	47.1	8.2
2022年 1月	上旬	-11.3	-7.6	▲3.7	-6.1	-4.0	▲2.1	-18.6	-12.7	▲5.9	10.0	17.3	▲7.3	5.0	5.7	▲0.7	29.5	16.4	13.1
	中旬	-5.2	-9.6	4.4	-1.6	-5.3	3.7	-9.9	-15.1	5.2	14.0	12.3	1.7	5.0	3.9	1.1	18.8	26.0	▲7.2
	下旬	-9.4	-8.3	▲1.1	-4.4	-3.9	▲0.5	-15.8	-14.0	▲1.8	8.5	13.0	▲4.5	4.0	5.6	▲1.6	34.2	31.6	2.6
平均または合計		-8.6	-8.5	▲0.1	-4.0	-4.4	0.4	-14.8	-13.9	▲0.8	32.5	42.6	▲10.1	14.0	15.2	▲1.2	82.5	74.0	8.5
2月	上旬	-7.9	-9.0	1.1	-2.9	-4.5	1.6	-14.1	-15.0	0.9	6.5	11.7	▲5.2	5.0	4.7	0.3	29.2	29.3	▲0.1
	中旬	-8.4	-6.0	▲2.4	-2.7	-2.0	▲0.7	-14.3	-10.8	▲3.5	8.0	17.2	▲9.2	2.0	5.4	▲3.4	52.8	28.6	24.2
	下旬	-3.5	-6.5	3.0	-0.6	-1.4	0.8	-8.3	-12.8	4.5	13.5	10.1	3.4	6.0	3.7	2.3	13.1	32.1	▲19.0
平均または合計		-6.6	-7.2	0.6	-2.1	-2.6	0.6	-12.2	-12.9	0.6	28.0	39.0	▲11.0	13.0	13.8	▲0.8	95.1	90.0	5.1
3月	上旬	-2.9	-3.8	0.9	1.6	0.9	0.7	-9.4	-9.5	0.1	16.0	19.1	▲3.1	7.0	4.7	2.3	31.5	39.7	▲8.2
	中旬	-0.2	-1.7	1.5	3.9	3.2	0.7	-4.1	-7.6	3.5	9.5	15.0	▲5.5	4.0	3.9	0.1	21.2	49.2	▲28.0
	下旬	1.4	0.1	1.3	5.7	5.4	0.3	-3.7	-5.6	1.9	20.5	11.0	9.5	6.0	4.5	1.5	34.7	61.9	▲27.2
平均または合計		-0.6	-1.8	1.2	3.7	3.2	0.6	-5.7	-7.6	1.8	46.0	45.1	0.9	17.0	13.1	3.9	87.4	150.8	▲63.4
4月	上旬	3.9	2.0	1.9	9.5	6.7	2.8	-2.2	-3.2	1.0	3.0	19.4	▲16.4	3.0	4.4	▲1.4	60.8	54.0	6.8
	中旬	5.8	4.5	1.3	12.7	10.2	2.5	-0.6	-1.0	0.4	27.5	12.5	15.0	3.0	4.1	▲1.1	62.6	60.5	2.1
	下旬	9.4	7.7	1.7	16.2	14.4	1.8	0.5	1.1	▲0.6	0.5	11.2	▲10.7	1.0	3.4	▲2.4	79.9	69.1	10.8
平均または合計		6.4	4.7	1.6	12.8	10.4	2.4	-0.8	-1.0	0.3	31.0	43.1	▲12.1	7.0	11.9	▲4.9	203.3	183.6	19.7
5月	上旬	9.7	10.2	▲0.5	15.9	16.4	▲0.5	3.0	4.3	▲1.3	59.0	21.9	37.1	5.0	4.5	0.5	57.7	55.6	2.1
	中旬	13.9	12.0	1.9	20.5	18.3	2.2	7.3	6.2	1.1	15.0	22.6	▲7.6	4.0	3.5	0.5	71.0	62.7	8.3
	下旬	15.1	14.9	0.2	21.6	21.2	0.4	9.8	8.9	0.9	30.5	24.4	6.1	5.0	4.1	0.9	72.2	77.4	▲5.2
平均または合計		12.9	12.4	0.5	19.3	18.6	0.7	6.7	6.5	0.2	104.5	68.9	35.6	14.0	12.1	1.9	200.9	195.7	5.2
6月	上旬	12.0	15.9	▲3.9	19.4	22.3	▲2.9	6.5	10.2	▲3.7	17.0	18.5	▲1.5	2.0	3.5	▲1.5	92.7	66.1	26.6
	中旬	16.9	16.6	0.3	22.5	22.2	0.3	12.2	11.9	0.3	41.0	32.7	8.3	6.0	4.2	1.8	50.5	54.2	▲3.7
	下旬	19.3	17.5	1.8	23.9	23.2	0.7	15.2	12.6	2.6	91.0	20.4	70.6	6.0	3.5	2.5	36.3	59.4	▲23.1
平均または合計		16.1	16.7	▲0.6	21.9	22.6	▲0.6	11.3	11.6	▲0.3	149.0	71.6	77.4	14.0	11.2	2.8	179.5	179.7	▲0.2
7月	上旬	23.1	19.8	3.3	29.6	25.3	4.3	18.4	15.3	3.1	3.0	50.2	▲47.2	2.0	3.9	▲1.9	67.7	56.9	10.8
	中旬	21.4	21.1	0.3	28.0	27.1	0.9	17.1	16.3	0.8	39.0	22.2	16.8	7.0	3.2	3.8	45.6	70.1	▲24.5
	下旬	21.3	22.9	▲1.6	27.3	28.7	▲1.4	16.5	18.2	▲1.7	3.5	58.9	▲55.4	2.0	3.4	▲1.4	75.9	69.4	6.5
平均または合計		21.9	21.3	0.7	28.3	27.0	1.3	17.3	16.6	0.7	45.5	131.3	▲85.8	11.0	10.5	0.5	189.2	196.4	▲7.2
8月	上旬	21.4	22.1	▲0.7	27.1	28.0	▲0.9	17.4	17.5	▲0.1	152.5	62.5	90.0	5.0	3.8	1.2	44.3	61.1	▲16.8
	中旬	20.7	20.6	0.1	25.9	25.7	0.2	16.4	16.4	0.0	80.0	78.4	1.6	5.0	5.3	▲0.3	47.9	45.0	2.9
	下旬	18.8	19.6	▲0.8	24.4	25.3	▲0.9	13.8	15.0	▲1.2	23.0	52.5	▲29.5	5.0	5.5	▲0.5	49.2	57.1	▲7.9
平均または合計		20.3	20.8	▲0.5	25.8	26.3	▲0.5	15.9	16.3	▲0.4	255.5	193.4	62.1	15.0	14.6	0.4	141.4	163.2	▲21.8
9月	上旬	18.3	19.0	▲0.7	25.2	24.9	0.3	11.6	14.0	▲2.4	3.5	38.8	▲35.3	1.0	4.3	▲3.3	80.0	55.3	24.7
	中旬	16.5	15.8	0.7	23.0	21.6	1.4	10.5	10.8	▲0.3	83.5	46.5	37.0	4.0	4.5	▲0.5	44.2	46.8	▲2.6
	下旬	14.3	14.0	0.3	21.7	20.4	1.3	8.5	8.5	0.0	29.0	28.8	0.2	2.0	4.1	▲2.1	64.1	54.2	9.9
平均または合計		16.4	16.3	0.1	23.3	22.3	1.0	10.2	11.1	▲0.9	116.0	114.1	1.9	7.0	12.9	▲5.9	188.3	156.3	32.0
10月	上旬	11.3	11.6	▲0.3	16.8	17.2	▲0.4	6.3	6.6	▲0.3	57.5	39.6	17.9	3.0	5.2	▲2.2	45.5	42.8	2.7
	中旬	10.0	8.2	1.8	15.9	13.6	2.3	5.4	3.1	2.3	27.5	40.6	▲13.1	6.0	6.1	▲0.1	44.1	39.7	4.4
	下旬	7.3	6.3	1.0	13.2	11.6	1.6	1.6	1.8	▲0.2	17.5	42.0	▲24.5	4.0	5.9	▲1.9	52.5	38.7	13.8
平均または合計		9.5	8.7	0.8	15.3	14.1	1.2	4.4	3.8	0.6	102.5	122.2	▲19.7	13.0	17.2	▲4.2	142.1	121.2	20.9

注1 ）比布アメダス観測値。平年は過去10ヶ年の平均値。
　2 ）▲印は平年に比べて低または減を示す。

表３　農耕期間積算値（５月～９月）

期間 ＼ 項目		平均気温（℃）	降水量（mm）	降水日数（日）	日照時間（hrs）
５月上旬	本年	2,671	671	61	899
～	平年	2,649	570	60	875
９月下旬	比較	22	101	1	24

注 1）比布アメダス観測地。
　2）平年値は過去10カ年の平均値。
　3）▲は平年に比べて減を示す。

２．作　況

１）各作物の耕種概要

各作物の耕種概要は下記の通りである。

表４－１　水稲の耕種概要

育苗	苗種類	播種量（乾籾g/箱）	育苗日数（日）	培土中成分量（g/箱）*				置き床施肥量（g/㎡）		
				N	P_2O_5	K_2O	MgO	N	P_2O_5	K_2O
	成苗ポット	35	35	0.5	1.0	0.8	0.2	27	34	18

本田	移植日（月/日）	畦幅（cm）	株間（cm）	１株本数（本/株）	栽植密度（株/㎡）	施肥量（kg/10a）			堆肥（t/10a）
						N	P_2O_5	K_2O	
	5/20	33.0	12.0	3	25.3	8.0	9.7	6.9	1

* 成苗用培土Ｈを約1.43(kg/箱)充填

表４－２　畑作物の耕種概要

作物名	前作物	畦幅（cm）	株間（cm）	１株本数（本）	播種粒数（粒/m^2）	株数（株/10a）	施肥量（kg/10a）				
							N	P_2O_5	K_2O	MgO	堆肥
秋まき小麦	緑肥大豆	30	-	-	255	-	4.0+6.0+4.0	10.0	6.0	2.5	-
春まき小麦	緑肥えん麦	30	-	-	340	-	9.0	16.2	10.8	4.5	-
大豆	ばれいしょ	60	20	2	-	8333	1.8	13.2	9.0	4.2	-
小豆	ばれいしょ	60	20	2	-	8333	3.0	12.0	7.0	2.5	-
ばれいしょ	緑肥大豆	75	30	-	-	4444	7.5	15.0	10.5	3.8	-

注)秋まき小麦 N:基肥+起生期+止葉期

２）各作物の作況

（１）水　稲：平年並

播種は平年より５日遅い４月20日に行った。出芽の揃いは良好であった。移植は平年より１日遅い５月20日に行った。移植時の草丈は平年より1.5～1.7㎝短く、第１葉鞘高は0.2㎝短かった。葉数と茎数は平年並であった。苗100本当たりの地上部乾物重は平年より0.43～0.52g軽かったが、苗の充実度を示す地上部乾物重/草丈は平年並であった。

移植後の活着は順調であったが、５月下旬から６月上旬にかけての低温により生育は停滞した。６月中旬の気温は平年並に推移し、生育は回復した。６月20日時点の草丈は平年より2.0～3.3㎝低かったが、㎡当たりの茎数は9～28%多く、主稈葉数は0.1～0.3枚多かった。

６月下旬から７月上旬にかけて高温に推移したことから、生育は進んだ。幼穂形成期は平年と比べ同等から１日早く、止葉期と出穂期はいずれも2～3日早かった。茎数は「ななつぼし」で平年より3%多く、「ゆめぴりか」で6%少なかった。草丈は平年より10.1～10.3㎝長く、主稈の止葉葉数は0.5～0.7枚多かった。

７月下旬は低温で経過し、穂揃日数は平年より2日長かった。稈長は平年より3.9～5.7㎝長く、穂長は0.8～1.0㎝長かった。㎡当たり穂数は「ななつぼし」で2%多く、「ゆめぴりか」で6%少なかった。

登熟期間を通じて平年並の日照時間が得られたことから、登熟は順調に進んだ。成熟期は平年より3～4日早く、登熟日数は平年並であった。稔実歩合は平年より1.4～2.4ポイント高かったが、一穂籾数は12～14%少なく、㎡当たり稔実籾数は9～16%少なかった。登熟歩合は平年より2.6～4.2ポイント高かった。

精籾重は平年比97～98%であった。屑米歩合は平年より0～2.7ポイント高く、精玄米千粒重は0.7～1.3g重かった。精玄米重は「ななつぼし」が686kg/10a、「ゆめぴりか」が622kg/10aで、各々平年比100%と98%であった。玄米の検査等級は「ななつぼし」では１等で平年よりやや優れ、「ゆめぴりか」では１等で優れた。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

表５　水稲の生育

項目 ＼ 品種名			ななつぼし			ゆめぴりか		
			本年	平年	比較	本年	平年	比較
生育期節	播種期（月.日）		4.20	4.15	5	4.20	4.15	5
	移植期（月.日）		5.20	5.19	1	5.20	5.19	1
	幼穂形成期（月.日）		6.23	6.24	△1	6.24	6.24	0
	止葉期（月.日）		7.10	7.12	△2	7.10	7.13	△3
	出穂期（月.日）		7.20	7.22	△2	7.19	7.22	△3
	成熟期（月.日）		9.05	9.09	△4	9.06	9.09	△3
	穂揃日数　（日）		10	8	2	10	8	2
	登熟日数　（日）		47	49	▲ 2	49	49	0
	生育日数　（日）		138	147	▲ 9	139	147	▲ 8
移植時	草丈　（cm）		12.4	14.1	▲ 1.7	12.6	14.1	▲ 1.5
	葉数　（枚）		4.0	4.1	▲ 0.1	4.2	4.2	0.0
	茎数　（本）		1.9	1.9	0.0	2.0	2.0	0.0
	第１葉鞘高(cm)		2.2	2.4	▲ 0.2	2.3	2.5	▲ 0.2
	地上部乾物重(g/100本)		4.02	4.54	▲ 0.52	4.11	4.54	▲ 0.43
	地上部乾物重/草丈		0.33	0.32	0.01	0.33	0.32	0.01
本田生育	葉数（枚）	6月20日	8.2	7.9	0.3	8.4	8.3	0.1
		7月20日	10.8	10.1	0.7	11.0	10.5	0.5
		止葉葉数	10.8	10.1	0.7	11.0	10.5	0.5
	茎数（本/㎡）	6月20日	643	501	142	633	579	54
		7月20日	745	723	22	806	861	▲ 55
	草丈（cm）	6月20日	36.7	38.7	▲ 2.0	33.4	36.7	▲ 3.3
		7月20日	89.7	79.6	10.1	88.9	78.6	10.3
成熟期	稈長　（cm）		74.4	68.7	5.7	69.5	65.6	3.9
	穂長　（cm）		17.6	16.6	1.0	17.4	16.6	0.8
	穂数　（本/㎡）		691	680	11	756	802	▲ 46
収量構成要素	一穂籾数　（粒）		46.1	52.5	▲ 6.4	38.4	44.6	▲ 6.2
	㎡当たり籾数　（×千）		31.9	35.6	▲ 3.7	29.1	35.7	▲ 6.6
	稔実歩合　（%）		96.2	94.8	1.4	94.3	91.9	2.4
	㎡当たり稔実籾数　（×千）		30.7	33.7	▲ 3.0	27.4	32.8	▲ 5.4
	同上比　（%）		91	100	▲ 9	84	100	▲ 16
	登熟歩合　（%）		89.6	87.0	2.6	86.7	82.5	4.2
	籾摺歩合　（%）		81.0	80.3	0.7	77.1	78.7	▲ 1.6
	屑米歩合　（%）		2.4	2.4	0.0	5.9	3.2	2.7
	精玄米千粒重　（g）		22.8	22.1	0.7	23.7	22.4	1.3
収量	藁重　（kg/10a）		735	633	102	703	607	96
	精籾重　（kg/10a）		832	854	▲ 22	794	808	▲ 14
	精玄米重　（kg/10a）		686	688	▲ 2	622	636	▲ 14
	収量平年比　（%）		100	100	0	98	100	▲ 2
	検査等級　（等）		1	1下	-	1	2中	-

注1）平年値は前7カ年の中、令和元年(最凶年)、平成29年(最豊年)を除く5カ年の平均値。
　2）△は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。
　3）精玄米千粒重および精玄米重：網目1.90㎜以上、水分15%換算。

（2）秋まき小麦：平年並

播種は平年より1日遅い9月16日に行った。出芽期は平年より3日早い9月22日であった。出芽後の気温、降水量、日照時間は概ね平年並であった。草丈は長く、葉数および茎数は平年並であった。

根雪始は平年より23日遅く、根雪終は平年より5日早く、積雪期間は平年より28日短い115日であった。越冬後の雪腐病発病度は平年より低く、越冬茎歩合は高かった。草丈は平年より長く、茎数は平年より多かった。

出穂期は平年より1日早い6月3日であった。草丈は平年並で、茎数は平年より多かった。

7月上旬の気温が平年より高く推移したため、成熟期は平年より3日早い7月14日であった。成熟期の稈長は平年並、穂長はやや短く、穂数は平年並であった。子実重は平年比95%であったが、容積重、千粒重、蛋白質含有率は平年並であった。検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

表6　秋まき小麦の生育および収量

項目 ＼ 品種名		きたほなみ 本年	平年	比較
播種期 (月.日)		9.16	9.15	1
出芽期 (月.日)		9.22	9.25	△ 3
出穂期 (月.日)		6.03	6.04	△ 1
成熟期 (月.日)		7.14	7.17	△ 3
越冬茎歩合 (%)		131.4	106.9	24.5
雪腐病発病度		5.6	16.8	▲ 11.2
葉数(枚)	令 3年10月20日	4.5	4.5	0.0
草丈 (cm)	令 3年10月20日	20.4	17.9	2.5
	令 4年 5月20日	46.7	41.9	4.8
	令 4年 6月20日	89.2	88.2	1.0
茎数 (本/m^2)	令 3年10月20日	766	774	▲ 8
	令 4年 5月20日	1149	1006	143
	令 4年 6月20日	688	577	111
成熟期	稈長 (cm)	80	78	2
	穂長 (cm)	8.0	8.6	▲ 0.6
	穂数(本/m^2)	497	497	0
子実重 (kg/10a)		530	560	▲ 30
同上平年比 (%)		95	100	▲ 5
容積重 (g/L)		837	842	▲ 5
千粒重 (g)		41.9	42.7	▲ 0.8
蛋白質含有率 (%)		9.0	9.1	▲ 0.1
検査等級 (等)		1等	1等	-

注1）平年値は前7か年中、平成27年（最豊年）、平成30年（最凶年、収穫年度）を除く5か年の平均値。

2）△は平年より早を、▲は平年より“減”を示す。

（3）春まき小麦：不良

播種は平年より3日早い4月15日に行った。播種後の気温は平年よりやや高めに経過したものの降水量がやや少なかったことから、出芽期は平年より3日早い4月29日であった。

5月の気象は平年並であったものの、6月上中旬は低温傾向で経過したことから、出穂期は平年並となった。一方、6月下旬は寡照となり、茎の無効化が進んだ。稈長および穂長は平年並であるが、穂数は平年の77%であった。

成熟期は平年より8日早かった。出穂期は平年並であったため登熟期間は平年より8日 短かった。穂数が少なく登熟期間が短かったことから、子実重は平年比78%と低収で、千粒重および蛋白質含有率は平年をやや下回った。容積重は平年並で、検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

表7　春まき小麦の生育および収量

項目 ＼ 品種名		春よ恋 本年	春よ恋 平年	春よ恋 比較
播種期 (月.日)		4.15	4.18	△ 3
出芽期 (月.日)		4.29	5.02	△ 3
出穂期 (月.日)		6.18	6.18	0
成熟期 (月.日)		7.22	7.30	△ 8
草丈 (cm)	5月20日	26.5	22.2	4.3
	6月20日	87.1	82.0	5.1
茎数 (本/㎡)	5月20日	744	714	30
	6月20日	757	752	5
成熟期	稈長 (cm)	100	96	4
	穂長 (cm)	8.5	8.6	▲ 0.1
	穂数 (本/㎡)	405	527	▲ 122
子実重 (kg/10a)		378	487	▲ 109
同上平年比 (%)		78	100	▲ 22
容積重 (g/L)		828	825	3
千粒重 (g)		38.7	39.9	▲ 1.2
蛋白質含有率 (%)		10.8	11.8	▲ 1.0
検査等級 (等)		1	2上	-

注1）平年値は前7か年中、平成28年（最豊年）、令和3年（最凶年）を除く5か年の平均値。

2）△は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

（4）大　豆：やや良

播種後に適度な降雨があったことから出芽期は平年より5日早い5月28日であった。6月20日時点の主茎長および主茎節数は平年並であった。その後の生育も順調に経過したことから、開花期は平年より4日早い7月9日であった。開花期の主茎長は平年に比べ長く、主茎節数は多く、分枝数はやや多かった。

8月上旬の降雨により、試験区の一部が倒伏した。生育が平年より早く推移したこと、また9月上旬に晴天が続いたことから、成熟期は平年より6日早い9月13日であった。成熟期の主茎長および主茎節数は平年よりやや上回っており、分枝数は平年並で、着莢数は平年比116%と多かった。子実重は432kg/10aで平年比107%と平年よりやや多かった。百粒重は32.1gと平年より軽く、屑粒率は1.5%と平年並だった。検査等級は2等中であった。

したがって、本年の作況は「やや良」である。

表8　　大豆の生育および収量

項目 ＼ 品種名		ユキホマレ		
		本年	平年	比較
播種期（月.日）		5.18	5.19	△ 1
出芽期（月.日）		5.28	6.02	△ 5
開花期（月.日）		7.09	7.13	△ 4
成熟期（月.日）		9.13	9.19	△ 6
主茎長（cm）	6月20日	13.2	12.6	0.6
	7月20日	61.5	53.3	8.2
	8月20日	60.1	59.2	0.9
	9月20日	62.3	58.2	4.1
	成熟期	62.3	58.2	4.1
主茎節数（節）	6月20日	4.0	3.6	0.4
	7月20日	10.9	9.3	1.6
	8月20日	10.9	10.0	0.9
	9月20日	11.1	9.9	1.2
	成熟期	11.1	9.9	1.2
分枝数（本/株）	7月20日	6.2	5.7	0.5
	8月20日	6.3	6.5	▲ 0.2
	9月20日	6.4	6.2	0.2
	成熟期	6.4	6.2	0.2
着莢数（個/株）	8月20日	90	84	6
	9月20日	87	75	12
	成熟期	87	75	12
子実重（kg/10a）		432	403	29
同上平年比（%）		107	100	7
百粒重（g）		32.1	34.1	▲ 2.0
屑粒率（%）		1.5	1.5	0.0
検査等級（等）		2中	2中	-

注1）平年値は前7か年中、平成27年（最豊年）、令和3年（最凶年）を除く5か年の平均値。
2）△は平年より“早”を、▲は平年より”減”を示す。

（5）小　豆：平年並

播種は平年並の5月24日に行った。出芽期は平年より1日遅く、6月下旬以降、気温は高温傾向で推移したことから、主茎長が長く、本葉数、分枝数は平年より多く推移した。8月8日から9日にかけての豪雨により倒伏が発生し、その後の降雨と風により8月中旬には全倒伏となった。開花期は平年より3日早く、成熟期は平年より7日早かった。8月中旬以降の低温により落莢は多かったが、分枝数は平年よりやや多く、着莢数は平年をやや上回った。百粒重は平年よりやや軽く、子実重は平年比102%であった。屑粒率は平年をやや上回り、検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

表9　小豆の生育および収量

項目 ＼ 品種名		エリモショウズ 本年	平年	比較
播種期（月.日）		5.24	5.24	0
出芽期（月.日）		6.10	6.09	1
開花期（月.日）		7.22	7.25	△ 3
成熟期（月.日）		9.09	9.16	△ 7
主茎長（cm）	6月20日	4.9	4.2	0.7
	7月20日	31.6	21.6	10.0
	8月20日	66.1	65.0	1.1
	成熟期	75	71	4.0
本葉数（枚）	6月20日	0.3	0.9	▲ 0.6
	7月20日	8.5	7.4	1.1
	8月20日	12.4	11.9	0.5
主茎節数（節）	成熟期	14.1	13.5	0.6
分枝数（本/株）	7月20日	6.9	5.3	1.6
	8月20日	7.2	5.9	1.3
	成熟期	6.8	6.2	0.6
着莢数（個/株）	8月20日	83	57	26
	成熟期	61	55	6
子実重（kg/10a）		371	364	7
同上平年比（%）		102	100	2
百粒重（g）		13.4	14.3	▲ 0.9
屑粒率（%）		8.1	3.1	5.0
検査等級（等）		1	2下	-

注1）平年値は前7か年中、平成29年（最豊年）、令和3年（最凶年）を除く5か年の平均値。
2）△は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

（6）ばれいしょ：良

植付けは、平年より 1 日遅い 5 月 10 日に行った。6 月上旬に低温があったものの、萌芽期は平年より 1 日早かった。7 月中旬までは概して高温傾向で推移し、降雨も適度にあったことから、茎長はほぼ平年並で、開花始は平年より 1 日早く、枯凋期は平年より 6 日早かった。上いも数は平年よりやや多く、上いもの平均重が平年並で、上いも収量が平年比 107%であった。中以上いも収量は平年比 121%、規格内いも重が平年比 129%と平年を上回った。でん粉価は平年を 1.8 ポイント上回った。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

表 10　ばれいしょの生育および収量

項目 ＼ 品種名		男爵薯 本年	男爵薯 平年	男爵薯 比較
植付期（月.日）		5.10	5.09	1
萌芽期（月.日）		5.27	5.28	△ 1
開花始（月.日）		6.23	6.24	△ 1
枯凋期（月.日）		8.22	8.28	△ 6
茎長 (cm)	6月20日	36.8	32.8	4.0
	7月20日	48.8	48.4	0.4
上いも数 (個/株)	7月20日	10.1	9.0	1.1
	8月20日	12.8	10.2	2.6
上いもの平均重(g)	7月20日	78	74	4
	8月20日	92	102	▲ 10
上いも収量 (kg/10a)	7月20日	3480	2905	575
	8月20日	5252	4586	666
でん粉価 (%)	7月20日	15.6	14.5	1.1
	8月20日	16.4	14.9	1.5
収穫期	上いも数（個/株）	11.1	10.4	0.7
	上いもの平均重（g）	103	104	▲ 1
	上いも収量（kg/10a）	5084	4744	340
	同上平年比（%）	107	100	7
	中以上いも収量（kg/10a）	5125	4249	876
	同上平年比（%）	121	100	21
	規格内いも収量（kg/10a）	5027	3884	1143
	同上平年比（%）	129	100	29
	でん粉価（%）	16.2	14.4	1.8

注1）平年値は前7か年中、平成28年（最豊年）、平成30年（最凶年）を除く5か年の平均値。

2）△は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

Ⅲ　試験研究及び地域支援活動

１．各グループの試験研究成果及び地域支援活動等の概要

１）水稲グループ

水稲育種試験を担当し、極良食味品種および良質糯品種の開発を行っている。

優良品種決定現地調査１年目で、対照品種を「ふっくりんこ」として供試した「上育 483 号」は、「ふっくりんこ」に比べ、出穂期、成熟期は同等で粒厚が厚く多収である。タンパク質含有率が低く食味は同等で、耐冷性といもち病圃場抵抗性は優る。一方、「ふっくりんこ」の置き換え品種には玄米品質の向上が要望されているが、玄米品質は「ふっくりんこ」並で向上が見込めない。対照品種に置き換えるほどの特性を有していないと判断し、試験中止とする。

優良品種決定現地調査１年目で、対照品種を「風の子もち」、「はくちょうもち」として供試した「上育糯 484 号」は、出穂期は「風の子もち」と同等だが成熟期はやや遅い。耐冷性およびいもち病圃場抵抗性は対照品種に優る。玄米品質に優れ、玄米白度が高い。育成場では多収であったが、他場および現地では低収または成熟期の遅さが欠点としてあげられ、評価は高くなかった。対照品種に置き換えるほどの特性を有していないと判断し、試験中止とした。

同じく基本調査１年目で、対照品種を「ふっくりんこ」として供試した「上育 485 号」は、「ふっくりんこ」と比べ、出穂期、成熟期は平均で１日早く、多収でタンパク質含有率が低い。耐冷性はは対照品種と同等。いもち病圃場抵抗性も優る。玄米品質と炊飯米の外観が優れ、食味総合評価も良好な結果が得られている。「ふっくりんこ」置き換えの現地要望を満たすため、次年度は、新たに現地試験に供試することとした。

基本調査１年目で、対照品種を「風の子もち」、「はくちょうもち」として供試した「上育糯 486 号」は、「風の子もち」に比べ、出穂期は１日、成熟期は 2 日遅い。収量性、穂ばらみ期耐冷性が優れる。糯米生産団地は北限に多く、「風の子もち」より遅い熟期は作付けが見込めない。そのため、多収だが出穂期・成熟期が遅れることから品種置き換えは難しく、試験中止とした。

また、「上育 487 号」および「上育 488 号」を新配付系統として選抜した。「上育 487 号」は「ななつぼし」「きたくりん」対照で、収量性に優り、いもち病抵抗性は「きたくりん」並で「ななつぼし」に優る。玄米品質は「ななつぼし」並で「きたくりん」にやや優る。食味は外観の白さが優るが、総合は「ななつぼし」並。「上育 488 号」は「ふっくりんこ」「きたくりん」対照で、収量性に優り、いもち病圃場抵抗性は「きたくりん」並で「ななつぼし」に優る。玄米品質は「ふっくりんこ」にやや優り「きたくりん」に優る。食味は外観の白さが優るが、総合は「ふっくりんこ」「きたくりん」並。

２）生産技術グループ

水稲の栽培技術開発、環境保全・土壌肥料に関する試験研究、病害虫に関する試験研究、新農業資材試験、発生予察事業、 畑作物および園芸作物に関する優良品種決定試験や栽培法の試験ならびに地域支援活動を担当している。

栽培環境部門では「赤いんげんまめ『きたロッソ』の窒素追肥技術と加工適性を考慮した収穫時期の設定」と「『Dr.アミノアップ』の種いも浸漬および葉面散布による加工用ばれいしょの増収効果」の成果をとりまとめ、成績会議で指導参考事項となった。また、他農試と連携して「環境保全型有機質資源施用基準の設定調査」、「農地管理実態調査」を、農研機構と連携して「寒冷・積雪地域等の水田における温室効果ガス削減に資する栽培管理の方法等に関する調査」を実施した。

病虫部門では「にんにくの新規ウイルス検査法（FDA 法）によるウイルスフリー種苗管理技術」の成果を花・野菜技術センター等と共同で取りまとめ、成績会議に提案し、普及推進事項となった。また、「病害虫発生予察調査」では、水稲、小麦の病害虫、ヤガ類・コナガ・マメシンクイガについて調査を行った。また、「農作物病害虫診断試験」では、担当管内の作物に発生した病害虫、生育不良等の原因について調査を行った。

畑作部門では、有望系統の上川地域における適応性の評価を行い、小豆「十育 180 号」、てん菜「HT 50」「KWS 8K839」が北海道優良品種となった。

園芸部門では、「半促成長期どり作型トマトにおける環境・養分制御技術を用いた省力多収技術」について道南農試、花・野菜技術センター、北方建築総合研究所と共に取りまとめて成績会議に提案し、指導参考事項となった。戦略研究において冬季無加温栽培した新規野菜ボーレコールを栽培法を開発し、流通・実需評価を行った。

地域支援活動は、新型コロナウイルス感染拡大対策のため活動制限を強いられたが、地域農業技術支援会議として地域要望課題の収集を行うとともに、普及センターの支援要請や部会活動などに対して支援を行った。

２．各グループの試験研究課題

１）水稲グループ

A　水稲品種開発

（１）水稲品種開発事業Ⅱ　（令和2～6年）

多様なニーズに対応し、北海道稲作の発展に貢献する、省力栽培が可能な品種、耐冷・耐病性が優れる高品質・極良食味、高品質糯品種、並びに収量性を向上させた業務･加工用水稲品種の早期育成を目指す。

（２）「日本一の米どころ北海道」の実現へ向けた水稲新品種の開発促進　１．極良食味で耐病虫性の強い多収品種の開発へ向けた選抜強化（令和2～6年)

他産地に先駆けた先進的な取り組みが可能となる品種の育成へ向け、中後期世代の選抜を強化する。

（３）多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立（第Ⅳ期）　1．極多収スタンダード品種および直播栽培用多収品種の開発強化（令和元～5年）

（中央農試水田農業グループが実施主体）

初期世代において、収量性、耐病性、耐冷性等の選抜を強化し、極多収で農業特性や業務用炊飯適性に優れた系統、および直播適性を備えた早生で多収な系統の開発を促進する。

（４）多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立（第Ⅳ期）　2．多収で品質・食味の安定したプレミアムおよびミドル品種の開発強化

（令和元～5年）

水稲の初期世代の選抜強化により、耐冷性、耐病性が向上し、品質・食味の高位安定した品種を開発する。

（５）多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立（第Ⅳ期）　3．極多収品種の育成に向けた多収要因の解明と素材開発　（令和元～5年）

現行品種より 20%以上多収な各用途向け水稲極多収品種の開発を加速化させるため、収量性に関連する基礎的情報を収集し、極多収素材の開発を行う。水稲有望系統の多収性を評価し、栽培特性として整理する。

（６）「ダントツ日本一」の産地を目指す北海道もち米品種の開発促進」（令和 4～8 年）

既存品種より 10%以上多収、耐冷性“強”、葉いもち抵抗性“やや強”以上を目標にもち米品種の開発を促進させる。

（７）酒造好適米の特性分析による品質選抜強化と醸造適性の早期評価　（令和 2～5 年）

新たな酒米品種開発にむけた有望系統の道北地域における地域適応性を明らかにする。

（８）「ゆめぴりか」のブランド力強化に向けた戻し交配による形質改良系統の育成　（令和 2～6 年）

「ゆめぴりか」のブランド力強化のため、「ゆめぴりか」として販売できる形質が改善された従属品種の開発に向け、戻し交配と葯培養によりタンパク質含有率が 0.3～0.5 ポイント低下し、穂いもち圃場抵抗性を 1 ランク以上向上させるなど「ゆめぴりか」の欠点を改良した系統を育成する。

B　優良品種決定試験

（９）優決　水稲（優決基本相当）

（昭和 29 年～継続）

育成された有望系統について、生産力その他諸特性を調査し、当地における適応性を検討する

（10）優決　水稲（優決現地相当）

（昭和 29 年～継続）

育成された有望系統について、生産力その他諸特性を調査し、現地における適応性を検討する。

C　新優良品種普及促進

（11）水稲新優良品種普及促進事業

（昭和 42 年～継続）

新品種の速やかな普及を図るために有望系統の種

子の増殖を行う。

D　農業資材試験

（12）水稲除草剤及び水稲生育調節剤の実用化試験
（昭和 45 年～継続）

直播用剤６点について、実用化試験を行う。

２）生産技術グループ

A　水稲栽培法改善試験

（１）多様なニーズに対応する米品種改良並びに栽培技術早期確立（第Ⅳ期）　4-1)「上育 471 号（えみまる）」の湛水直播栽培指針および窒素追肥診断基準の確立　（令和元～5 年）

水稲生産者の労働力不足に対応可能な直播栽培をさらに普及させるため、良食味で低温苗立ち性に優れる直播栽培向け新品種「上育 471 号（えみまる）」の栽培指針を策定する。

（２）多様なニーズに対応する米品種改良並びに栽培技術早期確立（第Ⅳ期）　4-3)多収新品種候補の栽培技術の開発　（令和元～5 年）

「空育 195 号」の栽培特性を明らかにして現行品種より 20%増収が可能な多収栽培技術を開発する。

B　畑作物栽培法改善試験

（３）気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進（第 3 期）　3)-(1)春まき小麦新品種候補「HW8 号」の高品質安定多収栽培技術の開発　（令和 4～6 年）

春まき小麦新品種候補「HW8 号」の適正播種量、植物成長調節剤の使用条件や窒素施肥量および生育指標の設定により高品質な安定多収栽培技術を開発する。

（４）「Dr.アミノアップ」による加工用ばれいしょの増収効果の検討　（令和 2～4 年）

加工用ばれいしょの安定栽培のため、気象・土壌の異なる条件で「Dr.アミノアップ」の増収効果を検討する。

（５）上川地域に適した洋風料理向け赤いんげんまめ「きたロッソ」の栽培法と加工適性評価
（令和 2～4 年）

上川地域において収量性と収穫時期を両立できる栽培法を開発する。さらに海外産レッドキドニーとの加工適性や食味の違いを用途別に明らかにする。

（６）畑作物に対する肥効調節型肥料の施用効果試験　（令和 4～6 年）

畑作物に対する、被覆肥料を活用した省力かつ環境負荷軽減のための施肥法の代替技術を開発する。

C　土壌保全・環境保全・土地改良に関する調査

（７）環境保全型有機質資源施用基準の設定調査
（平成 10 年～継続）

農業の基盤である土壌環境の経年的変化を総合的に把握し、適切な土壌管理のための基礎資料を得る。

（８）農地土壌炭素貯留等基礎調査事業（農地管理実態調査）　（令和 3～5 年）

農家ほ場を対象として、土壌炭素蓄積量及び有機物施用、作物残渣の鋤込み等による土壌炭素の維持蓄積に寄与すると考えられる農地管理を調査する。

（９）農地土壌炭素貯留等基礎調査事業（農地管理技術検証）　寒冷・積雪地域等の水田における温室効果ガス削減に資する栽培管理の方法等に関する調査　（令和 3～7 年）

水田における栽培管理による温室効果ガスの削減を定量化するため、移植栽培よりも試験事例が少なく、湛水期間が短い直播栽培において中干しおよび秋耕によるメタン削減量を調査する。

（10）農業農村整備事業等に係る土壌調査
（昭和 40 年～継続）

道営土地改良事業計画地区の土壌断面及び理化学性を調査し、改良対策と工種導入時の留意点を示す。また、整備事業の効果を把握するため、整備による土壌改良効果と作物収量の関連を検討する。

D　病害虫試験

（11）農作物病害虫生理障害診断試験・緊急対策試験　（令和 2～6 年）

突発的に発生する病害虫や栄養生理障害による被害を回避するため、それらの診断と対応策を提示する。併せて、道内で新たに発生した病害虫の情報を記録し蓄積する。

（12）病害虫発生予察調査　（昭和 16 年～継続）

植物防疫法に基づいて、病害虫の発生予察法の確立を図るとともに、発生予察情報を関係機関に提供して病害虫防除の適正を図る。

（13）データを活用した病害虫防除予測技術の開発
（令和 4 年）

将来の病害虫発生予測技術構築に取り組む際に活

用できるよう、主要作物における圃場内の気象情報を蓄積する。また、フェロモントラップ捕獲虫数の自動計測手法を作成する。

（14）アスパラガス生産に働き方改革を！改植技術「枠板式高畝栽培」を基盤とした省力安定栽培システムの開発　　北海道におけるアスパラガス枠板式高畝栽培システムの適性評価　　（令和 2～6 年）

露地栽培において「枠板式高畝栽培システム」の特性を評価し、本システムの特徴を活用した疫病対策としての有効性を評価する。

E　畑作物品種開発（麦類）

（15）畑作物の地域適応性検定試験（秋まき小麦、春まき小麦、優決基本相当）　（昭和 29 年～継続）

育成された有望系統について、生産力その他諸特性を調査し、地域における適応性を検討する（北農研・北見農試育成の秋まき小麦および春まき小麦系統を検定）。

（16）春まき小麦の品種選定試験　1.適応性試験（優決基本相当）、3-(4)初冬まき栽培特性　（令和 3～7 年）

ホクレン農総研が育成した春まき小麦の有望系統について、生産力その他諸特性を調査し、地域における適応性を検討する。また、初冬播き適性を検討する。

（17）二条大麦の品種選定試験　1)適応性検定基本調査（優決基本相当）　（令和 3～5 年）

サッポロビール(株)で育成したビール大麦の有望系統について、上川管内における適応性検定試験を実施し、優良品種決定の資とする。

（18）優決　麦類（秋まき小麦、二条大麦、優決現地相当）　（昭和 28 年～継続）

（19）畑作物の地域適応性検定試験（秋まき小麦、春まき小麦、優決現地相当）（昭和 29 年～継続）

(18)(19)の両課題とも、有望系統の現地での適応性を検定する（北農研センター・北見農試育成の秋まき小麦系統、北見農試・ホクレン育成の春まき小麦系統およびサッポロビール(株)育成の大麦系統を検定）。

（20）気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進（第 3 期）　2)-(6)-②上川地域の適応性の評価　（令和元～3 年）

北見農試で育成した春まき小麦有望系統について、上川管内における適応性検定試験を実施し、優良品種決定の資とする。

（21）小麦育種研究に係る系統適応性・特性検定試験　（令和 4 年）

北農研センター育成系統について、地域における特性（系統適応性および雪腐褐色小粒菌核病抵抗性である耐雪性）を評価する。

F　畑作物品種開発（豆類）

（22）畑作物の地域適応性検定試験（大豆、優決基本相当）　（昭和 29 年～継続）

大豆の十勝農試育成系統等について、当地方における適応性を検討する。

（23）畑作物の地域適応性検定試験（小豆、優決基本相当）　（昭和 29 年～継続）

小豆の十勝農試育成系統等について、当地方における適応性を検討する。

（24）優決　大豆（優決現地相当）　（昭和 51 年～継続）

大豆の十勝農試育成系統等について、当地方における適応性を検討する。

（25）優決　小豆（優決現地相当）　（昭和 46 年～継続）

小豆の十勝農試育成系統等について、当地方における適応性を検討する。

（26）優決　菜豆（優決現地相当）　（昭和 47 年～継続）

菜豆の十勝農試育成系統等について、当地方における適応性を検討する。

（27）DNA マーカーを利用した茎疫病抵抗性小豆品種の開発強化　（令和 2～4 年）

茎疫病圃場抵抗性 DNA マーカーの有効性を検証するとともに、道央・道東向けの高品質で多収な茎疫病圃場抵抗性を有する系統を選抜することで、小豆品種を早期に開発・普及し、道産小豆の安定供給に努める。

（28）小豆の障害抵抗生に優れる品種開発促進　（令和 4～6 年）

小豆の有望系統および育成系統のアズキ茎疫病レース 3・レース 4 およびアズキ萎凋病に対する抵抗性を明らかにする。

G　畑作物品種開発（根菜類）

（29）畑作物の地域適応性検定試験（馬鈴しょ、優決基本相当）　（昭和 29 年～継続）

馬鈴しょの北農研・北見農試育成系統について、上川管内における適応性を検討する。

（30）優決　馬鈴しょ（優決現地相当）
（昭和 42 年～継続）

馬鈴しょの北農研・北見農試育成系統について、上川管内における適応性を検討する。

（31）馬鈴しょ輸入品種等選定試験　1)生産力検定試験（優決基本相当）、2)現地試験（優決現地相当）　（令和 3～7 年）

馬鈴しょ輸入品種および民間育成系統について、上川管内における適応性を検討する。

（32）てん菜輸入品種検定試験　（令和元～5 年）

てん菜輸入品種（系統）の特性および地域適応性を検定する。

Ｈ　野菜類品種開発

（33）果実品質に優れ多収な春どりいちご品種の開発　3)地域適応性検定　（令和3～5 年）

「ゆきララ」並の果実品質を有する多収品種を開発する。

Ｉ　野菜栽培法改善

（34）パイプハウスにおける環境および養分制御による省力多収技術の開発　（令和 2～4 年）

加温ハウスにおける環境制御（自動換気、加温、CO_2施用等）が生育・収量に与える効果を明らかにするとともに本道の栽培体系に合致した環境制御技術を開発する。

（35）持続可能な施設園芸のための環境制御技術の高度化　（令和 3～5 年）

圃場内で太陽光発電した電力を用いて、環境制御を効果的かつ安定的に行うシステムを構築する。

（36）近未来の社会構造の変化を見据えた力強い北海道食産業の構築　新規道産野菜の加工・流通技術の開発　（令和 2～5 年）

良食味なケールの一種であるボーレコールを冬期無加温ハウスにおいて、長期にわたり安定供給する生産加工流通体系を構築する。

Ｊ　作物育種法全般に関する試験

（37）情報処理による安定確収品種選抜手法の開発と育種データベース整備　（令和 4 年）

品種開発事業で得た生育・特性データを解析し、気象変動に強い品種、多収品種を選抜するために着目すべき形質や指標を明らかにする手法を開発するとともに、地域性の図示など「情報の見える化」を進める。また、共通で利用可能な作物育種及び種子生産の支援ツールを開発する。

Ｋ　農業資材試験

（38）除草剤・生育調節剤の実用化試験
（昭和 45 年～継続）

秋まき小麦、アスパラガスに対する除草剤の北海道における実用性を確認する。

（39）殺菌剤・殺虫剤の実用化試験
（昭和 45 年～継続）

各種病害虫に対する新規農薬 28 点の防除効果を検討し、その実用化を図る。

Ｌ　革新的技術導入による地域支援

（40）上川地域の小麦なまぐさ黒穂病に対する防除効果の現地実証　（令和 3～4 年）

上川地域におけるなまぐさ黒穂病の被害を軽減するため、耕種的防除および薬剤による消毒と茎葉散布の有効性を実証する。

３．地域支援活動

１）地域農業技術支援会議

地域農業技術支援会議は、地域農業が抱える課題に迅速に対応するため、農試・普及センター・振興局が一体となって協働により課題解決を図る体制として各振興局ごとに設置されたものであり、課題の把握と集約、対応方策の策定、役割分担と合意形成、実証試験等の実施と成果とりまとめ、検証、評価、普及などを行うこととしている。

本年度の活動として、上川支援会議では、事務局会議（4 月 20 日、11 月 18 日、1 月 10 日）、四者会議（2 月 13 日）、要望聞き取り調査（4 月 13 日旭川市農業法人、7 月 29 日 JA びえい、9 月 15 日 JA あさひかわ、11 月 8 日 JA 北ひびき、12 月 6 日 JA 当麻、鷹栖町）を開催し、必要な調査等を進めた。また、成果を地域に還元する地域関係者会議を開催した（5 月 26 日）。農業関係者が参集する各種会議等で支援会議の PR を行うとともに簡易版の要望調査票を配布した（3 月 4、10 日）。本年度収集した要望課題は 7 課題（きゅうりホモプシス病対策、新土壌病害（きゅうり・すいか）対策、きゅうり・トマトの養液栽培、サツマイモ苗自家増殖、スイー

トコーン黒穂病対策、てんさい直播における生石灰作条施用法、冬期無加温周年野菜）であった。

留萌支援会議では、事務局会議（6 月 29 日、3 月 13 日 web 会議）、要望対応打合せ（粉末加工、スマート農業、10 月 31 日）、プロジェクト課題現地調査（10 月 26､27 日）、四者会議（3 月 29 日 web 会議）を行った。地域関係者会議は次年度 6 月に開催予定。本年度収集した要望課題は 8 課題（冬期野菜栽培技術、直播用糯米品種開発、粉末加工技術、コスト低減対策、スマート農業推進、直播技術、水田活用、稲 WCS 栽培技術）であった。前年度要望に基づくプロジェクト課題として実施したものは 1 課題（畑作物のレベル向上）で、関係機関と共に現地実証試験での効果検証に取り組んだ。

２）道北地域農業技術センター連絡会議（NATEC）

上川、留萌、宗谷管内における自治体や生産者団体、民間企業が設置した調査研究・研修機関の情報交換の場として NATEC が設置されている。本年度は現地検討会（8 月 22 日、花野菜技術センター）、幹事会（6 月 22 日、1 月 23 日）、地域情報交換会・総会（3 月 15 日 web）等の活動を行った。

３）上川水稲直播ネットワーク

上川、留萌管内における水稲直播栽培技術の普及啓蒙を図る目的で活動を行った。事務局を上川農試が担い、事務局会議（5 月 24 日、10 月 12 日共にメール開催）、理事会（6 月 23 日、11 月 1 日）、夏期情報交換会（7 月 21 日、剣淵町）、冬期情報交換会・総会（12 月 19 日）を開催した。

Ⅳ　試験研究の成果と普及

１．技術普及に移された成果

１）普及奨励事項

（１）小豆「十育 180 号」（十勝農試豆類畑作 G、上川農試生産技術 G）

コンバインによるダイレクト収穫に適し、落葉病（レース１）、茎疫病（レース１、３、４）、萎凋病に抵抗性を持つ普通小豆品種。小豆の省力安定生産に寄与できる。

（２）てん菜「HT50」（北見農試麦類畑作 G、十勝農試豆類畑作 G、中央農試作物 G、上川農試生産技術 G、北海道農産協会）

「リボルタ」と同程度の４病害抵抗性（そう根病、褐斑病、根腐病、黒根病）を有し、「バラトン」並の収量性をもつ品種。てんさいの安定生産に貢献できる。

（３）てん菜「KWS 8K839」（北見農試麦類畑作 G、十勝農試豆類畑作 G、中央農試作物 G、上川農試生産技術 G、北海道農産協会）

極めて強い褐斑病抵抗性を有し、収量性が「カーベ 2K314」より優れる品種。褐斑病が蔓延しやすい地域において、てんさいの安定生産に貢献できる。

２）普及推進事項

（１）にんにくの新規ウイルス検査法（FDA 法）によるウイルスフリー種苗管理技術（花野セ生産技術 G、上川農試生産技術 G、北海道大学、ホクサン㈱）

にんにくのウイルスを高感度・短時間で検出する手法の開発と再感染対策技術を開発した。

３）指導参考事項

（１）赤いんげんまめ「きたロッソ」の窒素追肥技術と加工適性を考慮した収穫時期の設定（上川農試生産技術 G）

「きたロッソ」に対する開花期窒素追肥の増収効果と加工適性を考慮した収穫時期の熟莢率を明らかにした。

（２）「Dr.アミノアップ」の種いも浸漬および葉面散布による加工用ばれいしょの増収効果（上川農試生産技術 G）

バイオスティミラントである本資材を用いて増収効果の得られる種いも浸漬と葉面散布の条件を明らかにした。

（３）半促成長期どり作型トマトにおける環境・養分制御技術を用いた省力多収技術（道南農試生産技術 G、花野セ花き野菜 G、上川農試生産技術 G、北方建築総合研究所）

自動換気装置、加温機、CO_2 発生装置を組み合わせて、トマトの収量増加および不良果（裂果、病害果）の低減効果が得られる複合環境制御技術を開発した。

４）研究参考事項および行政参考事項

なし

２．論文ならびに資料

１）研究論文、試験成績

著者名	論文名	学会誌名	号数	頁	発行年
T.Suzuki, **Y.Yoshimura**, S.Ohnishi, H.Jinno, T.Sonoda, **M. Kasuya**, C.Souma, T.Inoue, M.Kurushima, A.Sugawara, S.Maeno, T.Komatsuda	Wheat yellow mosaic virus resistant line, ‘Kitami-94’, developed by introgression of two resistance genes from the cultivar ‘Madsen’	Breeding Science	72	297-305	2022
Daisuke Sasaki	First record of Aulacorthum solani (Hemiptera: Aphididae) occurring on Boenninghausenia albiflora var. japonica (Rutaceae)	Proceedings of the Entomological Society of Washington	124	118-125	2022
H. Tanaka, **D. Sasaki**, J. Choi, F. Husnik, S. Kamitani	Two new species of mealybugs (Hemiptera: Coccomorpha: Pseudococcidae) from Japan	Zootaxa	5168	306-318	2022
熊谷聡，五十嵐俊成，中本洋	水稲減化学肥料栽培における有機質肥料の早期施肥技術	日本土壌肥料学会雑誌	93	77-82	2022

（つづき）

著者名	論文名	学会誌名	号数	頁	発行年
佐々木大介	スマートフォンに装着した市販精子観察キットによるトマトの葉かび病とすすかび病の野外診断	北日本病害虫研究会報	73	108-112	2022
S.Furuyama, H.Okamoto, T.Jishi	Effect of Cold Exposure on Brix Value of Borecole Leaves Grown in an Unheated Greenhouse in Hokkaido, Subarctic Region	The Horticulture Journal	Advance online publication	DOI:https://doi.org/10.2503/hortj.qh-003	2023
R. Uy, **M.Kayamori**, C. Nakashima	Characterization of Penicillium species isolated from Dioscorea polystachya in Hokkaido, Japan	MYCOSCIENCE	64	11-18	2023
中村隆一, 黒瀬忍	生食用ブドウ果実のゴマシオ型着色不良障害	北農	90(1)	8-11	2023
長浜恵	きゅうり褐斑病の耐性菌発生に対応した防除対策	北農	90(2)	8-15	2023

2）口頭・ポスター発表

発表者名(所属)	発表名	発表場所	要旨巻号頁	開催地	開催期間
山下瑠花,藤木卓巳,**堀川謙太郎**,春日純,上野敬司,実山豊,鈴木卓	In vitro のリンゴ果肉組織で外与の［1-13C］ソルビトールから生合成されたスクロース分布の MALDI-TOF MSイメージングによる可視化	園芸学会令和4年度秋季大会	園芸学研究 別冊. 21, 118, 2022	山形県鶴岡市	9/7-13
高濱雅幹,岡本結香,**古山真一**,加藤淳	北海道での冬季栽培管理がボーレコールのBrix値，乾物率および糖組成に及ぼす影響	園芸学会令和4年度秋季大会	園芸学研究 別冊. 21, 166, 2022	山形県鶴岡市	9/7-13
藤木卓巳,長田亜梨沙,**堀川謙太郎**,実山豊,鈴木卓	MALDI-TOF MS imagingを用いたアブシシン酸，糖，有機酸およびアントシアニンのイチゴ果実内分布の可視化	園芸学会令和4年度秋季大会	園芸学研究 別冊. 21, 170, 2022	山形県鶴岡市	9/7-13
後藤英次	日本は肥料を持続的に利用できるのか？ ２．肥料はどこまで減らせるか　１）水田	日本土壌肥料学会北海道支部2022年度シンポジウム	日本土壌肥料学会北海道支部2022年度シンポジウム講演要旨，3，オンライン，2022	オンライン	11/5
中村隆一，**栢森美如**，**齋藤優介**，**唐星児**，大崎満	土壌表層管理技術の開発	日本土壌肥料学会北海道支部2022年度秋季大会	―	札幌	12/1
道満剛平，大西志全，来嶋正朋，**堀川謙太郎**，菅原彰，井上哲也，山口直矢	遺伝子型環境相互作用(G×E)を加味した秋まき小麦育成系統の収量安定性評価	日本育種学会・日本作物学会北海道談話会令和4年度年次講演会	日本育種学会・日本作物学会北海道談話会会報. 63, 111, 2022	オンライン	12/3
熊谷聡	北海道における水稲一発処理除草剤を用いたノビエ防除可能期間の変遷	日本育種学会・日本作物学会北海道談話会令和4年度年次講演会	日本育種学会・日本作物学会北海道談話会会報. 63, 211, 2022	オンライン	12/3
古山真一,**高濱雅幹**,立松宏一	秋季のパイプハウスにおけるトマト模擬果実を用いた結露強度の推定	2022年度北海道園芸研究談話会研究発表会	北海道園芸研究談話会報，56，22-23，2022	札幌	12/4
高濱雅幹，下鈴果，**古山真一**，加藤淳	収穫後貯蔵方法の違いがボーレコールの品質に及ぼす影響	北海道園芸研究談話会2022年度研究発表会	北海道園芸研究談話会報，56，32-33，2022	札幌	12/4
長濱恵	北海道におけるアスパラガス茎枯病の薬剤に対する感受性	第76回北日本病害虫研究会	北日本病害虫研究会報. 74，印刷中，2023	札幌	2/21-22
佐々木大介	道北地方におけるアブラムシの胎生越冬事例	第76回北日本病害虫研究発表会	北日本病害虫研究会報. 74，印刷中，2023	札幌	2/21-22

（つづき）

発表者名(所属)	発表名	発表場所	要旨巻号頁	開催地	開催期間
古山真一	パイプハウスでできる！トマトの統合環境制御	北海道野菜セミナー2023	―	札幌	3/1
加藤淳，大都莉穂，工藤慶太，**齋藤優介**	赤インゲンマメ「きたロッソ」の収穫時期が調理加工特性に及ぼす影響	日本食品科学工学会令和5年度北海道支部大会	日本食品科学工学会令和5年度北海道支部大会講演要旨集，23，2023	札幌	3/5
堀川謙太郎，佐藤圭，相馬ちひろ，**内田哲嗣**，**長濱恵**，長澤秀高，堀内優貴，鈴木孝子	アズキ遺伝資源「Acc1142」由来のアズキ茎疫病抵抗性に関するDNAマーカーの開発	日本育種学会第143回講演会	日本育種学会第143回講演会（育種学研究，25（別1），165	静岡	3/17-18
桂恵輔，川澄留佳，**長濱恵**，東條元昭，	Aphanomyces cochlioidesおよびAphanomyces sp.によるキヌア苗立枯病（新称）	令和5年度日本植物病理学会大会	日本植物病理学会報．88，印刷中，2023	オンライン	3/27-29
宇田宙生，高見永愛，原田守，高野怜，**栢森美如**，中島千晴	2種の病害に関与する複数種のCercospora属菌とPseudocercospora属菌	令和5年度日本植物病理学会大会	日本植物病理学会報．88，印刷中，2023	オンライン	3/27-29

3）専門雑誌、著書・資料

著者名（所属）	タイトル/書籍名	雑誌名/発行者	号数・ISBN	頁	発行年
唐星児	タマネギ移植栽培における肥効調節型肥料を用いた施肥技術	農家の友	876	74-75	2022
栢森美如	抵抗性“強”品種のマンゼブ水和剤を用いたてん菜褐斑病防除	農家の友	882	96-97	2022
竹内晴信	上川水稲直播ネットワーク　２年ぶりに夏期情報交換会を開催	農家の友	880	102-104	2022
古山真一	農学校1年1組施設園芸の時間・複合環境制御	ニューカントリー	821	56-57	2022
唐星児	なるほど新技術　たまねぎ　移植栽培に肥効調節型肥料を用いて分施を省略	ニューカントリー	822	46-47	2022
古山真一	農学校1年2組施設園芸の時間・複合環境制御機器	ニューカントリー	822	56-57	2022
栢森美如	てん菜　抵抗性〝強〟にマンゼブ水和剤を用いたテンサイ褐斑病防除	ニューカントリー	824	71-73	2022
髙濱雅幹	農学校1年1組施設園芸の時間・冬期の利用と通年栽培	ニューカントリー	826	82-93	2022
齋藤優介	北海道の施肥最適化マニュアル（一般うるち米（移植栽培）の施肥管理　リン酸、カリ、苦土施肥　ケイ酸・鉄資材の施用）	ニューカントリー	2022年秋季臨時増刊号	45-49	2022
中村隆一	北海道の施肥最適化マニュアル（直播栽培（たん水直播）の施肥）	ニューカントリー	2022年秋季臨時増刊号	52-55	2022
唐星児	北海道の施肥最適化マニュアル（園芸における有機物施用技術）	ニューカントリー	2022年秋季臨時増刊号	107-111	2022

4）新聞等記事

著者名（所属）	タイトル	新聞等名	発行日
唐星児	タマネギ移植栽培　肥効調節型肥料を用いた施肥技術	農業共済新聞	6/15
髙濱雅幹	北海道発　野菜の無加温周年栽培 1	農業共済新聞「全国営農技術版」	11/16
髙濱雅幹	北海道発　野菜の無加温周年栽培 2	農業共済新聞「全国営農技術版」	11/23
髙濱雅幹	北海道発　野菜の無加温周年栽培 3	農業共済新聞「全国営農技術版」	12/1
髙濱雅幹	北海道発　野菜の無加温周年栽培 4	農業共済新聞「全国営農技術版」	12/7

5）印刷刊行物

名称	発行日	頁数	配布先
令和3年度（2021）上川農業試験場年報	9/30	32	簡易製本で場内配布、およびホームページにて公開

3．研修生の受入

1）普及指導員研修

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	対応者
指導力養成研修・高度専門技術研修（水稲・前期）	6/21-22	上川農試	3	農業改良普及センター職員	水稲Ｇ
指導力養成研修・高度専門技術研修（植物保護・中期）	8/1-5	上川農試	5	農業改良普及センター職員	生産技術Ｇ
令和４年度新技術伝達研修（留萌）	2/9	WEB		留萌農業改良普及センター職員	生産技術Ｇ
令和４年度新技術伝達研修（上川）	2/10	WEB		上川農業改良普及センター職員	生産技術Ｇ
留萌農業改良普及センター若手職員研修	8/17	上川農試	4	留萌農業改良普及センター職員	各Ｇ

2）学校教育研修・職場体験学習

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	対応者
インターンシップ	6/15-17	上川農試	3	旭川農業高校生徒	研究部長、各G
道立農業大学校学生集中講義	8/4	上川農試	11	道立農業大学校学生	水稲Ｇ
農業インタビュー	8/19	上川農試	10	比布中央学校７学年（中１）	研究部長
場内視察研修	6/15	上川農試	69	拓殖大学北海道短期大学学生	研究部長、各G
岩見沢農業高校ﾌｭｰﾁｬｰﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ研修	1/27	上川農試	10	岩見沢農業高校生徒	生産技術Ｇ
道教委教職員研修（岩見沢農業高校）	3/16	上川農試	1	岩見沢農業高校教員	生産技術Ｇ

3）JICA 研修

なし

4）その他

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	概要
上川管内農業改良普及センター所長・支所長会議視察研修	6/24	上川農試	15	普及センター所長、支所長、上川技術普及室、上川総合振興局	場概要説明、圃場視察

４．技術相談及び技術指導

１）技術相談

内容	相手方	月日	回答方法
大豆品種「とよみづき」「光黒」が放射線を使って育成されたものでないことの確認	生産者・生産法人	4/4	電話
マイナー作物（薬草）の農薬登録について	行政・地域指導機関	4/5	電話
水稲直播の播種深度試験方法について	民間会社・機関	4/12	電話
北海道で、コムギ黄さび病の発生は見られるか	大学・公的研究機関	4/12	メール
コムギ黄さび病	大学・公的研究機関	4/12	メール
催芽時の食酢処理について	生産者・生産法人	4/15	電話
水稲直播の播種深度について	生産者・生産法人	4/15	電話
水稲有機栽培における発酵鶏ふん肥料の早期施肥適用性と連用効果について	農改普及センター	4/15	メール
河川掘削土の客土材利用時の有害元素分析について	行政・地域指導機関	4/19	メール
馬鈴しょの覆土深について	農改普及センター	5/6	電話
剣淵町での醸造用ブドウ栽培について	行政・地域指導機関	5/10	対面
剣淵町での醸造用ブドウ栽培について	行政・地域指導機関	5/26	メール
水稲の硫黄欠乏について	民間会社・機関	5/27	メール
水稲育苗苗の生育不良について	農改普及センター	6/1	メール
シャクヤクの病害診断について	民間会社・機関	6/1	メール
高温時の水田掛け流し管理の実態について	生産者団体	6/9	電話
かぼちゃの差圧通風乾燥について	民間会社・機関	6/9	電話
スイカの炭腐病かどうか	農改普及センター	6/15	メール
「コシヒカリ」が北海道で栽培できないのはなぜか	行政・地域指導機関	6/16	電話
水田雑草の草種特定について	農改普及センター	6/22	メール
スイカの炭腐病かどうか	農改普及センター	6/22	メール
ウレアホルム肥料の溶出試験方法について	行政・地域指導機関	6/24	メール
エライザ検定の発色の遅れについて	農改普及センター	8/2	メール
「上育糯484号」とそれと同じ出穂期の品種にごま葉枯病のような斑点がでている	大学・公的研究機関	8/4	メール
木質培土に関する技術相談	民間会社・機関	8/5	対面
アカヒゲホソミドリカスミカメフェロモントラップすくい取りについて	生産者団体	8/9	電話
アルファルファアブラムシとコンドウヒゲナガアブラムシに対するアルファルファの抵抗性試験法について	大学・公的研究機関	8/16	メール
北海道の水田の本州との違いについて	一般市民	9/1	メール
苫前の小豆の現地優決試験で早期枯死が見られ茎疫を疑っている	農改普及センター	9/5	メール
テンサイ褐斑病菌のマンゼブ剤に対する感受性検定について	民間会社・機関	9/26	電話、メール
たまねぎ直播資料	生産者・生産法人	10/4	メール
剣淵町での醸造用ブドウ越冬準備について	行政・地域指導機関	10/13	メール
水稲収穫調査の水分補正について	民間会社・機関	10/13	メール
トリコデルマ菌「V-プロテクト」の試験事例の有無	民間会社・機関	10/21	メール
木質培土に関する技術相談	民間会社・機関	10/24	対面
環境制御の仕様について	民間会社・機関	11/1	メール
猿払村実証ハウスに導入する環境制御機器について	行政・地域指導機関	11/4	メール
高糖度トマト栽培に適した環境制御機器について	行政・地域指導機関	11/7	メール
粘土質の土壌では米や野菜が育ちやすい、というのは本当か（TBS系「ｱﾄﾞﾍﾞﾝﾁｬｰﾊﾞﾗｴﾃｨ冒険少年」に係る取材）	民間会社・機関	11/24	電話
Arsprout-Piの操作方法について	民間会社・機関	11/24	メール
大麦培地の作り方	大学・公的研究機関	11/24	メール
暖房機の選定方法について	民間会社・機関	11/28	メール
ばれいしょ疫病の発生消長と生育ステージについて（営農支援アプリへの応用）	民間会社・機関	11/30	ビデオ通話
農試における慣行防除体系について	民間会社・機関	12/8	メール
積算日射量の算定方法について	民間会社・機関	12/8	メール
テンサイ褐斑病に対するムテキDXの防除時期について	民間会社・機関	12/19	メール
大豆に混入した茶色粒について	農改普及センター	1/13	持ち込み
猿払村への環境制御機器導入について	行政・地域指導機関	1/25	メール
米粉用水稲品種「ほしのこ」について	生産者・生産法人	1/30	メール
スイートコーンにおける黄色 LED を利用した鱗翅目害虫防除技術について	学校・学生・生徒	2/6	電話
アルスプラウトの初期設定について	行政・地域指導機関	2/9	メール
いちご環境制御の設定値について	民間会社・機関	2/14	メール

（つづき）

内容	相手方	月日	回答方法
CO2センサの交換について	生産者・生産法人	2/15	対面
CO3センサの交換について	行政・地域指導機関	2/15	対面
前作のイチゴ培土に幼虫が混入しており、次作にこの培土を再利用した場合に害虫とならないか	行政・地域指導機関	2/16	対面
環境制御に用いるクラウドのSIM契約について	行政・地域指導機関	2/22	メール
ナスの環境制御について	農改普及センター	2/27	対面
報道内容の転用（高校受験対策冊子）について	民間会社・機関		メール

2）技術指導

内容	依頼者	月日	合同対応機関
きゅうりのしおれ	農改普及センター	6/23	無
タラノキの下葉から黄化脱落	農改普及センター	7/1	無
トマトの髄部黒変	農改普及センター	7/4	無
なんばんのしおれ	農改普及センター	7/6	無
大豆しおれや枯死	農改普及センター	7/8	無
イモチ病スペクトル測定について	大学・公的研究機関	7/8	無
たまねぎの葉が白化	農改普及センター	7/11	無
アスター地際部の表面が黒く腐敗	農改普及センター	7/15	花野菜技術センター
ミニトマトのしおれ	農改普及センター	7/25	無
紫サツマイモのしおれや枯死、地際部の変色	農改普及センター	7/25	無
（取材対応）北海道における酒米育種、坊主5号	報道関係者	7/25	無
さやえんどう生育不良、脇芽の奇形	農改普及センター	7/26	無
水稲の止葉の葉先が白く枯れる	農改普及センター	7/26	無
そばの花の咲きが悪く茎内部の褐変、虫の糞が詰まっていた（農家Ａ）	農改普及センター	7/28	無
そばの花の先が悪く茎内部の褐変、虫の糞、幼虫がいた（農家Ｂ）	農改普及センター	7/28	無
そばの上位葉のしおれ、茎内部に虫の糞、幼虫がいた（農家Ｃ）	農改普及センター	7/28	無
水稲いもち病スペクトル測定について	大学・公的研究機関	8/1	無
温暖化に伴う水稲育種について	大学・公的研究機関	8/3	無
(取材対応)北海道における稲作の歴史や品種改良	報道関係者	8/9	無
大豆莢の異型	農改普及センター	8/15	無
かぼちゃ出荷後に腐敗	民間会社・機関	9/9	無
環境制御技術指導のため	民間会社・機関	9/1-2	無
資料用トウモロコシの折損、維管束がスカスカ、基部が黒変	農改普及センター	9/13	無
（取材対応）北海道における稲作の歴史	報道関係者	9/14	無
ご飯外観の数値評価法について	報道関係者	9/16	無
トルコギキョウの葉に薄い白い斑紋	農改普及センター	9/20	無
ミツバ葉がかすり症状	民間会社・機関	9/20	無
ご飯外観の数値評価法について（追加質問）	報道関係者	9/21	無
冬野菜栽培技術について	民間会社・機関	9/27	無
高含水ポリマーの育苗資材としての利用について	民間会社・機関	9/29	無
馬鈴薯の貯蔵中に腐敗	農改普及センター	10/17	無
トマト褐色根腐病台木の効果調査	農改普及センター	10/17	無
農業講座（土壌断面調査の基礎研修）	農改普及センター	10/20	無
環境制御技術指導のため	民間会社・機関	10/20-21	無
サツマイモ収穫作業時に茎基部や表面が腐敗していた	農改普及センター	10/21	無
かぼちゃ出荷先での腐敗	農改普及センター	10/24	無
ブロッコリー肥大しない	農改普及センター	10/28	無
チンゲンサイ、コマツナに鱗翅目幼虫	大学・公的研究機関	11/4	無
比布町冬いちごの栽培管理と環境制御	農改普及センター	1/26	無
比布町冬いちごの栽培管理と環境制御	農改普及センター	3/2	無
比布町冬いちごの栽培管理と環境制御	農改普及センター	10/25	無
葉菜類の冬季無加温栽培技術指導	生産者団体	11/1	無

（つづき）

内容	依頼者	月日	合同対応機関
青梗菜、コマツナに鱗翅目幼虫	大学・公的研究機関	11/4	無
カボチャの外皮にふくれ、ひび割れ	農改普及センター	11/8	無
キャベツの外葉の縁が黒変	農改普及センター	11/22	無
葉菜類の冬季無加温栽培技術指導	生産者団体	12/14	無
伏せこみ栽培のみつばの葉の縁が黒変	農改普及センター	12/14	無
白菜の葉柄基部が褐変腐敗	農改普及センター	12/20	無
比布町冬いちごの栽培管理と環境制御	農改普及センター	12/21	無
環境制御技術指導	民間会社・機関	1/12-1/13	無
冬野菜・環境制御技術指導	農改普及センター	2/16-17	無
水稲新品種『コシヒカリ駿河』シリーズの栽培試験の依頼	大学・公的研究機関	3/11,17,24	無
トマトの養液栽培試験で使用するDIY環境制御盤の作成に係る技術指導	行政・地域指導機関		無

５．講師等の派遣

講演会等の名称	依頼元	月日	担当者
北海道もち米懇談会	北海道もち米団地農協連絡協議会	9/1	尾﨑洋人
まるごと学ぼう!!食育講座2022　作って食べて食べもの博士!	NPO法人北海道食の自給ネットワーク	7/16	熊谷聡
第4回伊達信金アグリベーシックセミナー	伊達信金	10/20	古山真一
令和4年度冬期情報交換会	上川水稲直播ネットワーク	12/19	中村隆一
令和４年度下川町農業研修道場公開講座	下川町農林課	1/20	古山真一
豆作り講習会	公益財団法人日本豆類協会	2/15	平山裕治
豆作り講習会	公益財団法人日本豆類協会	2/15	堀川謙太郎
豆作り講習会	公益財団法人日本豆類協会	2/15	齋藤優介
令和５年度地域農業技術センター連絡会議（NATEC）研究交流会	NATEC事務局	2/15	後藤英次
妹背牛町水稲直播研究会研修会	妹背牛町水稲直播研究会	12/23	中村隆一
妹背牛町水稲直播栽培技術講習研修会	妹背牛町水稲直播研究会	2/27	中村隆一

６．関連委員会・学会研究会役員

名称	機関名	担当者
北海道農産協会技術専門部会委員	（一社）北海道農産協会	堀川 謙太郎
令和４年度北海道米品質向上対策委員会委員	（一社）北海道農産協会	尾崎 洋人
損害評価会委員	北海道農業共済組合連合会	尾崎 洋人
ゆめぴりかコンテスト審査員	北海道米の新たなブランド形成協議会・北海道米販売拡大委員会	尾崎 洋人
旭川工業高等専門学校運営懇話会委員	旭川工業高等専門学校	吉村 康弘
殺菌剤耐性菌研究会　運営委員	日本植物病理学会	栢森 美如
植物病害診断研究会　幹事	日本植物病理学会	栢森 美如
技術士対応委員会　委員	日本植物病理学会	栢森 美如
日本土壌肥料学会代議員	日本土壌肥料学会	竹内 晴信
日本土壌肥料学会代議員	日本土壌肥料学会	後藤 英次

Ⅴ　広報・場運営・その他

１．広　報

１）一般参観来場者

新型コロナウイルスの感染拡大回避の観点から、本年度の受け入れを中止した。なお、特定の目的を持った視察研修については個別詮議により受け入れを行った。

２）公開デー

新型コロナウイルスの感染拡大回避の観点から、本年度の開催を中止した。

３）新技術発表会「道北農業新技術 2023」

新型コロナウイルスの感染拡大回避の観点から、オンラインでの開催とした。

開催日：令和 5 年 2 月 28 日(火) 13:00～15:45
場　所：北海道上川総合振興局 講堂
内　容：表 11 を参照
参加者：申込者は 27 機関・個人の 92 名

表 11　「道北農業新技術２０２３」の開催内容

講演タイトル	講演者
(1) 新品種･新技術トピックス	
たくさん穫れて病気にも強い！　お米新品種「空育195号」	木下雅文
コンバインで収穫ロスが少ない！ 小豆新品種「十育180号」	長澤秀高 [1)]
どうなる？農家戸数と多様な担い手の役割	渡辺康平 [1)]
収量と品質を高める！赤いんげん豆「きたロッソ」の栽培法	齋藤優介
パイプハウスの統合環境制御でトマトをたくさんとる！	古山真一
北海道の新顔野菜さつまいも　加工時の特徴は？　貯蔵中の変化は？	高濱雅幹
本当はこんなに大きくなる道産にんにく！　～新検査法と防虫ネットでウイルスから守る～	佐々木大介
(3) 令和4年度に普及に移される新しい技術の概要紹介	
てんさい新品種、秋まき小麦･ばれいしょ･たまねぎに関する生産管理技術、有機栽培技術、ばれいしょ･キャベツに関する病害虫防除技術、令和5年度注意を要する病害虫、に関する10課題	内田哲嗣
(4) 普及活動事例の紹介	
五者一体でぴっぷいちごを再振興！	道畑乃映 [2)]
(5) 技術普及実証試験成果の紹介	内田哲嗣
小麦なまぐさ黒穂病の防除対策	
(6) 地域農業技術支援会議の紹介	境　一葉 [3)]
(7) 全体質疑	

[1)] 十勝農試、[2)] 上川農業改良普及センター、[3)] 上川総合振興局

４）マスコミ等への対応

取材日	取材者	掲載・放送	内容	対応者
6/29	ホクレン	ホクレンWEB「GREEN」	新品種「えみまる」と直播栽培について	森田耕一
10/27	東京新聞	東京新聞10/28	北海道米が美味しくなった要因について	木下雅文
12/16	北海道新聞	北海道新聞全道版総合面1/11	北海道米の良食味化と品種改良について	木下雅文
3/4	ＮＨＫ旭川放送局	NHK道内ニュース3/4	温室における水稲育種材料の収穫	宗形信也

5）イベント等への出展

名称	出展日	イベント名称	内容	開催地
食べる．たいせつフェスティバル2022	9月17日	つくってみよう！「タネアート」	木の板に色とりどりの作物種子（主に穀類）を貼り付けて絵を描くことで、様々な作物の種子に親しんでもらう。	旭川市

2．場運営

1）場内委員会

（1）構　成

委員会名	委員長	副委員長	委　　員　（f：技術普及室職員、k：組合推薦者）
公開デー実行委員会	竹内晴信	内田哲嗣	伊東良浩　熊谷　聡　高濱雅幹　唐　星児　栢森美如
新技術発表会実行委員会	竹内晴信	内田哲嗣	徳光恵理　尾崎洋人　後藤英次　山岸修一[f]　－　－　－
業務委員会	尾崎洋人	－	中川　諭　森田耕一　堀川謙太郎　齋藤優介　佐々木大介　兼山幸記
図書・情報システム委員会	竹内晴信	堀川謙太郎	髙﨑由利奈　熊谷　聡　栢森美如　－　－　－　－
作況・気象委員会	高濱雅幹	－	熊谷　聡　堀川謙太郎　平山裕治　－　－　－　－
公宅委員会	徳光恵理	－	伊東良浩　平山裕二　樫村　優　佐々木大介　－　－　－
安全衛生委員会	吉村康弘		竹内晴信　徳光恵理　尾崎洋人[k]　伊東良浩[k]　熊谷　聡[k]　本田愛花　後藤英次[k]
入札参加指名選考委員会	安積大治	徳光恵理	竹内晴信　尾崎洋人　後藤英次　－　－　－　－
土壌病害対策委員会	竹内晴信	尾崎洋人	兼山幸記　木下雅文　唐　星児　長濱　恵　髙濱雅幹　内田哲嗣　－

各種活動の分担（* 遺伝資源連絡委員）				
	ＮＡＴＥＣ対応	竹内晴信　内田哲嗣	有機農業ネットワーク対応	長濱　恵　唐　星児
	遺伝資源担当者	尾崎洋人[*]	水稲直播ネットワーク対応	竹内晴信　内田哲嗣
	北農会協力委員	竹内晴信	上川地域道総研連絡会議対応	内田哲嗣

（2）活　動

業務委員会では、圃場管理業務、環境整備業務等を効率的かつ円滑に遂行するため、毎週木曜日に業務委員会を開催した。

図書・情報システム委員会では、ホームページの管理更新を行い、定期作況報告等を随時更新した。

安全衛生委員会では、安全推進会議（6 月から安全衛生委員会）を毎月開催し、安全衛生対策に関する意見交換、職場巡回点検、注意喚起などを実施した。

2）諸会議

（1）運営会議

場の管理運営に係る事項の協議を行う場として運営会議を開催した。開催日は 4 月 22 日、6 月 14 日、8 月 17 日、10 月 19 日、12 月 13 日、2 月 14 日の 6 回であった。

（2）北海道農業試験会議に係る場内検討会

研究課題検討会議、秋まき小麦設計会議、成績会議及び設計会議に提出する試験研究課題について、それぞれ 6 月 28 日、8 月 26 日、12 月 7 日、2 月 7～8 日に場内検討会を行った。

（3）現地委託試験検討会議

農業改良普及センターへの委託試験（主に新品種選定に係る業務）検討会議を開催した。成績検討会議は 11 月 29 日（畑作・野菜）および 11 月 30 日（水稲）に、そして設計検討会議は 3 月 22 日に開催した。いずれの会議も希望する農業改良普及センター職員と当場職員が参集した上、オンラインを併用したハイブリッド形式での開催とした。

３）職員の研修

（１）道総研職員研修

研修者名	研修名	研修期間	日数	場所
尾崎洋人、木下雅文、粕谷雅志、森田耕一、内田哲嗣、唐星児、髙濱雅幹、古山真一、中村隆一	道総研研究不正防止計画に基づく研究倫理研修	R4/5/7～7/29	-	ｅラーニングで実施
兼山幸記、本田愛花、尾崎洋人、木下雅文、粕谷雅志、森田耕一、内田哲嗣、唐星児、髙濱雅幹、古山真一、中村隆一、笹木正志、中川諭、樫村優、ほか非常勤職員19名	道総研研究不正防止計画に基づくコンプライアンス研修	R4.6.7	1	講堂
吉村康弘、竹内晴信、徳光恵理、尾崎洋人、後藤英次	メンタルヘルスセミナー（管理職）	R4.12.13	1	web
吉村康弘	ハラスメント研修	R5/1/24	1	web

（２）技術研修

研修者名	研修名	研修期間	日数	場所
兼山幸記 本田愛花	刈払機取扱作業者に対する安全衛生教育	5月19日	1	旭川市
竹内晴信	危険予知訓練リーダー研修	9月12-13日	2	札幌市
樫村　優	ゼロ災運動　危険予知訓練研修会	11月18日	1	札幌市
吉村康弘	職長・安全衛生責任者教育	11月28-29日	2	旭川市
本田愛花	安全衛生スタッフ向けリスクアセスメント実務研修	12月2日	1	札幌市
古山真一	冬道運転講習	3月13日	1	旭川市

（３）職場研修

（４）学会発表等リハーサル

研究職員の学会発表やプレゼンを実施するのに先立ち、場内において事前の発表リハーサルを随時行った。

研修等名	内容	講師	実施日	受講者数
交通安全情報の周知	北海道警察からの情報を全職員にメールで周知	総務課	随時	28
非常勤職員雇入時研修	事務手続き、行動とモラル（セクハラ等を中心）、安全な農作業、土壌病害虫汚染防	総務課、研究部長、水稲G（管理）	4月11日，5月11日	11
場内参観リハーサル	各グループの研究課題内容と圃場試験配置について	各研究G担当者	6月7日	50
e-ラーニング研修	コンプライアンス、ハラスメント、グローバルダイバーシティ	弁護士、㈱インクルージョンオフィス	8月9，19日	28
消防訓練	通報訓練、消火訓練、防火シャッターと防火扉の閉鎖訓練	大雪消防組合比布消防署	10月26日	45
交通安全研修	冬道の安全運転講習	ＤＶＤ視聴	12月8日	20
コミュニケーション研修	職場のコミュニケーションネットワーク向上等	日本経営協会	12月9日	28

４）表彰および学位授与

授賞日	件　名	受賞者	業　績
11/15	道総研職員表彰（永年勤続）	平山　裕治	30年勤続
11/15	道総研職員表彰（理事長賞）	高濱雅幹、古山真一	葉菜類の厳寒期無加温ハウス栽培技術
11/15	道総研職員表彰（農研本部長表彰）	樫村優、笹木正志、中川諭	上川農試の安全対策チームの取り組み

３．自己点検への対応

リストNo.	項目	報告件数等	備考
0	各機関へ直接寄せられたニーズ把握件数	0	
1	研究成果発表会・企業向けセミナーの開催件数	1	
2	研究会等の開催件数	0	
3	展示会等への出展件数	3	
4	研究報告書の発行件数	0	
5	技術資料の発行件数	1	
6	その他紙媒体発行件数	1	
7	普及組織との連絡会議等開催件数	23	
8	企業等へ訪問し広報活動した件数	0	
9	行政や企業等で活用された成果の数（企画で計数）	―	※
11	設備使用の件数	0	
12	研究成果発表会・企業向けセミナーによる公表件数	11	
13	研究会における公表件数	0	
14	学会誌等の掲載件数	26	
15	研究報告書での発表件数	1	
16	学会やシンポジウム等での発表件数	16	
17	ホームページ等による公表件数	1	
18	プレスリリース、定例報道懇談会の件数	0	
19	学会役員・委員件数	10	
20	技術相談の件数	57	
21	技術指導の件数	76	
22	講師等派遣の件数	11	
23	技術審査の件数	0	
26	研修会・講習会の開催状況（件数）	2	
26	研修会・講習会の開催状況（人数）	110	
27	研修者の受入状況（件数）	10	
27	研修者の受入状況（人数）	137	
28	連携協定先との事業の実施件数	0	
29	道関係部との連絡会議等の開催件数	15	
30	市町村との意見交換等の開催件数	2	
31	関係団体との意見交換等の開催件数	2	
32	道民意見把握調査の回答数	51	
33	出前授業の実施件数	1	
35	国内研修Ⅱ（外部講師招聘・受け入れ）	0	
36	専門研修Ⅰの派遣件数	0	
37	専門研修Ⅱの派遣件数	5	
38	道民向けイベントの開催件数	0	
38	道民向けイベントの延べ来場者数	0	
39	国際協力事業等への協力件数	0	
40	災害等に関係した技術指導件数	0	
41	災害等に関係した委員派遣件数	0	
42	ホームページ発信・更新件数	13	
43	メールマガジン発信件数	0	
44	フェイスブック発信件数	0	
45	その他電子媒体発信件数	0	
46	職場研修開催件数	7	
47	安全衛生委員会等開催件数	15	
48	機器設備の点検状況	随時	
49	その他職場研修	随時	
50	グリーン購入の金額	768千円	
51	視察・見学者の受入件数	21	
51	視察・見学者の受入人数	232	

注）調査対象外の項目は除いた。
会議等の開催件数にはweb開催やメール会議となったものを含む。
※は、農研本部で数値調整が行われている可能性あり。

本年報に記載した内容の無断転載、二次利用は固くお断りします。

令和４年度　上川農業試験場年報

令和５（2023）年１０月発行

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部上川農業試験場
〒078-0397　北海道上川郡比布町南１線５号
℡ 0166-85-2200　Fax 0166-85-4111　E-mail: kamikawa-agri@hro.or.jp